
IS ~ インフィニット・ストラトス ~ とあるはみ出し者の物語

シグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） とあるはみ出し者の物語

【Nコード】

N4017Z

【作者名】

シグマ

【あらすじ】

両親と共に飛行機テロに巻き込まれたが、たった一人だけ生還した少年。少年は聡明だった。だから、思った。「弾かれた」と。そして、少年は自らを『世界のはみ出し者』と自称した。というわけで、HDがクラッシュした作者がモチベ回復のために書いた奴です。主人公はISは使いませんが、それなりに強いキャラになると思います。例えるなら、ライダーマン。作者は特オタなので、どこかしこにそれ系のネタがありますので注意してください。

第1話 始まり(前書き)

あらすじにもあるとおりのおはなしです。

もちろん、他の小説も少しずつ書いているので「安心ください」。

……バックアップはこまめに取ったほうがいいですよ？

第1話 始まり

「父さん。この写真に写っている人って誰？ 父さんに似ているけど」

少年 桂はそう言って自分の父親に一枚の写真を見せた。そこには、自分の父親と顔が似ている男の二人が肩を組んで写っていた。

「ああ…これは兄さんだよ。まあ…もう十年くらい会ってないけどね」

父親はそう言って写真を懐かしそうに見ていた。桂はまだ小学生ではあるが、両親の血を受け継いでいるのか、勉強も運動も平均以上で聡明な少年だった。だから、父親の言葉に含むものを感じたが、聞くことはしなかった。だが、父親は肩をすくめて話し始めた。

「僕は…そうだねえ。桂なら分かると思うけど、ちょっと特殊な家の出身だね。まあ、特殊部隊を家業にしている家とってくれればいい。その宗家の次男坊だったんだ。今、桂に教えている体術とかもその家に伝わるものなんだよ」

「母さんもその家の出身なの？」

母親は生まれつき体が弱いが、元は国家レベルの研究に携わっていたという才女らしい。ならば、母親もその家出身かと思ったが父親は首を振ってその考えを否定した。

「母さんは、僕が家を出てから会ったんだ。丁度、僕が行き倒れそうなときにたすけてくれてね」

何でも、家業を兄弟のどちらが継ぐかで家が二つに割れそうになったため、兄に置き手紙を残して家を飛び出したのだが、すぐに路銀も尽き果て、ホームレスになるうかというときに不良に絡まれていた母親と出會ったらしい。

「まあ、兄さんは怒っているかもね。手紙だけ残して家業をほつぽり出したから。でも、兄さんと争うのは嫌だったし…丁度兄さんがロシアの特殊部隊隊長の娘さんと結婚しようとしていた時だったからね。幸せそうな二人を見ていると…ね？」

最初は政略結婚の予定で、自分が兄のどちらかと結婚することになっていたのだが、兄と彼女が仲良くしているのを見て自分がいないほうが余計な波風を立てないと考えたらしい。

「でも、そのおかげで母さんと会えたし、桂という息子を得ることができたんだ。兄さんには悪いけど、僕は今幸せだよ」

兄と連絡を取らないのは、家業を継ぐために共に努力をしてきたのに「兄弟で争いたくない」という甘い考えで逃げ出した自分を恥じてのことらしい。

「さて、そろそろ僕は仕事に行ってくるよ。桂も、そろそろ千冬ちやんたちが来る頃じゃないかな？」

「うん。父さん…別に恥じる必要はないと思う。きつとおじさんもそう思っているはず」

桂の言葉に父親はきよんとしていたが、しばらくするといつもの優しい笑みを浮かべて桂の頭を撫でた。

「ありがとう。そうだな…いつかは兄さんと会わないといけないな」

父親はそう言って仕事に向かった。桂はその後姿を暫く見ていたが、すぐに自分を迎えに来た幼なじみの二人の少女と共に学校へと向かった。

「桂：どうしたんだ？」

「はっ！ まさか、かつちゃんに春が！？ 誰だよ！ ゆる「そんな訳ない」」

桂が二人とあつたのは小学校の入学式。優秀な両親の影響なのか、すでに大学レベルの知識はあつた桂は、はつきりというなら達観していた。そのため、小学校で浮かれているクラスメイトを一步退いた目線で見えていたのだが、それに気づいて近寄ってきたのがこの二人。ほにやっとした感じの篠ノ之束が言うには「君は私と同じ感じがする」とのこと。

そこから、凜とした雰囲気、織斑千冬とも仲良くなり、今では結構仲が良い。

「父さんも苦労していたんだなあと思っただけだ」

「健二さんが？ ひよりさんのお世話もあるから？」

「いや、そういう訳じゃない。人間、知らないところで苦労しているんだと思っただけだ」

「ふん」

束は他者に対して排他的ではあるが、桂の両親は受け入れていた。特に、母親であるひよりに憧れている部分もある。

「あ、ならかつちゃん。今度、ひよりに会いに行きたいんだ。ちよっと、色々聞きたいことがあってさ！」

「ん？ まあ、電話で聞いてからになるとおもうが？」

「オッケー！ ありがとね！」

最近、束は何かに熱中している。千冬も関わっているらしいが、自分には教えてくれない。まあ、女同士の何かしらがあるのだろうと考えていた。

「そうね……ここはこうすればいいんじゃないかしら？」

「なるほどー！」

ある休日の病院の一室では桂の母であるひよりと東が何かの設計図を片手に意見交換を行っていた。千冬はひよりにお茶を淹れながら話を聞いている。

「そう言えば桂はどうしたの？ 健二さんはお仕事だと思うんだけど」

「かっちゃんなら鉛入りのベスト着てランニングに行くっていったよー」

最近、夫である健二から色々話を聞く。自分がかつて所属していた対暗部用暗部『更識』で受けていた教育を桂に施していたのだが、まるでスポンジが水を吸うようにどんどん自分の物としていった。

それを聞いて、ひよりはやはり血が繋がっているものだと思った。

健二は今でこそ優しい好青年であるが、生まれは警察の公安のような暗部組織のため、身体能力も知識も高かった。それに、時折寂しそうな顔をする。それは多分、実家への負い目でもあり、兄への負い目なのだろう。暗部組織なら健二の居場所をすぐ探せるはずなのだが、見つかっていないのは健二が何らかのツテを使っているからなのだろう。

「……………男って不器用ねえ」

「「??？」」

まだ「少女」である二人にはそこから辺は分からないのだろう。そう思いながらひよりは『インフィニット・ストラトス』と銘打たれた設計図の添削を始めた。

「……………剣道じゃないんだね」

「うん。まあ、基礎を学ぶという意味では剣道もいいんだけどね。それに、これはどちらかと言えばタイ捨流に近いかな？」

仕事から帰ってきた父親と修行をしていた桂はふと質問してみた。今は木刀を使っているのだが、剣道などではタブーの足元への攻撃や、剣道などではありえない目潰しに蹴撃や拳撃などを使っている。

「『剣』のみに限定するのは及第点と教えられたんだ。まあ、極めれば関係ないかも知れないけどね」

「ふーん。まあ、言いたいことは分かるよ」

要するに剣は手段の一つなのだろう。まあ、それは暗部組織とか傭兵なら当然と思い桂は父親との修行を再開した。

そして、翌年にひよりの体調が回復したため家族旅行に行くことになった。最初は束が自分も行きたいとごねていたが、千冬に殴られ

て気絶していた。

「桂。おみやげを頼む。出来れば、一夏も食べられるような」

「一夏…ああ、あのちびっ子が」

一回だけだが、千冬の弟を見たことがある。ただドギツイ女難の相が出ていたのは気になったが。

「ああ。頼めるか？」

「大丈夫だ。任せておけて」

束にも土産を買ってくると約束して、桂は両親と共に旅行に出かけた。目的地はヨーロッパらしい。空港で見送った二人はどんな土産を買ってくるのかがすごく楽しみだった。

「でも、よく考えるとかつちゃんのセンスって……」

「そう言えばそうだったな」

家に帰った二人は、桂のセンスが悪いことを思い出したのだ。

例えば、台所に現れる『G』を凄い生き物と思っていたり。いや、実際に凄い生き物ではあるのだが、ありがたがるのはご遠慮願いたい。

「まあ……ひよりさんもいるし大丈夫だろう。健二さんは……分からないけど」

「あ……」

ぶつちやけ健二も同様にセンスがない。よく温泉街の土産物屋にある『根性』とか書かれたキーホルダーを買ってくるような人だ。

「……まともなものを期待しよう」

「そだね。とりあえず、さっさとISを完成させてひよりさんをビツクリさせよ」と

立ち上がった束を横目に千冬が何気なくつけたテレビにあるニュース映像が流れていた。

フランスに向かっていた旅客機が自爆テロにより墜落したというニュースが。そして、その旅客機は桂たちが乗っている便だった。

初めに目に入ったのは、黒焦げになりながらも自分をかばっている両親の姿だった。

鼻に入ってきたのはむかつくほどの肉の焦げた匂い。

耳に入ってきたのは、未だに燃え盛る炎の音。

「父さん……母さん」

自分は大丈夫だと告げようとしたら、二人はボロボロに崩れた。まるで、役目を果たしたかのように。桂は聡明だった。だから、両親が死んだことも理解したし、泣くこともなかった。そして、立ち上がると声が聞こえた。

「た…たすけて……」

「……」

そこに居たのは、旅客機が墜ちる原因となったテロリストの生き残り。はて？ 自爆テロを敢行したのに助けてくれとはコレ如何に？ 桂は無表情のまま手近にあった瓦礫をテロリストの頭の上に落としました。

「ぎゃぴ」

訳の分からない断末魔の声を上げてテロリストは死んだ。そして、ふと思った。もしかしてこのテロで生き残ったのは自分だけなのかな？と。

「生き残りは……いるかな？」

しかし、あらかた探しても生き残りはいなかった。全員死んでいる。何故か仲間はずれにされた気分である。

「……弾かれた？」

自分だけ『みんな一緒に死んだ』という事実から弾かれた様に感じた。無論、それは運が良かったのと両親のおかげなのだろうが、どうせなら両親と一緒に死にたかったと思う。でも、自分はこうして生きている。

「……」

桂は無表情のまま立ち尽くしていた。しかし、すぐに歩き出した。

弾かれた自分はこのにいる必要はないと考えて。

数時間後にレスキュー隊が現場に到着したが、生存者はおらず『乗員乗客・犯人含めて全員死亡』という発表がなされた。

第1話 始まり（後書き）

ぶっちゃけ、千冬や束とからませたのは色々なフラグ（恋愛的な意味ではない）のため。まあ、プロットでは千冬が片思いになりそうだけだね。

とりあえず、次回は更識へ……。

第2話 流されて更識

「君が健二の息子、かな？」

「……誰だアンタ？」

ドイツで出会った企業の社長という男の協力で日本に戻ってきた桂。しかし、戻ってきてても自分がふらりと現場から消えたので自分は死んだことになっていて居場所はない。そのため、とりあえず裏路地の不良などを潰してその日暮らしを行っていたのだが、ある日自分が根城にしている廃ビルの一室に一人の男が現れた。

「私は…更識楯無という。まあ…君の叔父といったところかな？」

「なるほど…アンタが親父が言っていた「自分にはもったいない兄」ってか？」

「……弟の気持ちに気づいてやれなかったダメな兄だがね」

結構、この界限では有名になっていた自分。噂でしか知らないが外国で言うところの諜報機関である『更識』ならば調べられるかと結

論づけた。

「んで？ 何か御用ですかね？ 一応、俺は死んでいるんですが？」

戸籍上は死んでいるため、今までは闇医者とかに治療などは頼んでいた。もちろん金は、父親との特訓で身についた身体能力などを生かしたヤの付く自由業のお手伝いや、日本に戻るのに協力してもらった社長のコネを使っての便利屋の真似事などをして稼いでいた。恐らく、そんなことをしていたから見つかったのかと若干、自分の後先を考えないやり方に自己嫌悪。

「実は…君を『更識』に引き入れたいんだ。戸籍の方も、私の息子として作れるし」

「……それをやってアンタにメリットがあるのか？」

「……まあ、代償行為と思われても仕方ないかな？」

まあ、代償行為なのだろう。だが、桂はふと考える。最近、やはり肩身が狭くなってきた。後ろ盾がないことも関係しているのだろうが、やはり年齢がまだ中学生なのが問題だろう。そう考えるとこの話は悪いことではない。戸籍も偽造してくれる上に、『更識』という後ろ盾を得ることができる。それに、「弾かれた」と思っていた桂はこうやって受け入れてくれる人に甘えたい。

「そんなじゃ、お願いします。親父がどんな人間だったってのも聞きたいし」

「うん。それじゃあ…行くつか」

まあ、適当に楽しむかと思っていたのだが。

「おにいちゃん？」

「……当主。この二人は可愛いな」

「フッフッフ。ぜひともパパと呼んでくれ息子よ。まあ、それはそれとして見る目があるな」

ものすごく楽しんでいた。

「しっかし……まあ……まさか次期当主候補にするとはねえ」

「まあ、宗家筋だしね」

桂は『更識桂』として更識に入り、父親が現当主の弟ということ、桂自身が優秀なため現当主の子供を差し置いて次期当主最有力候補となっていた。

「ま、それでも納得はしない奴はいるわな」

しかし、ポツと出の桂がその場にいるのを嫌うものもいる。歳若い連中はそうでもないが、やはり中堅以上の人間は「家を捨てた男の息子が何故？」という気持ちだ。それを押さえているのは現当主である楯無にほかならない。

「私としては『実の娘』だからとか『長年仕えているから』とかの理由で次期当主を決めるつもりはない」

ここ数代は世襲制だったらしいが、それ以前は次期当主は前当主の指名制だったらしい。世襲制がいいのは分かる。実力による指名制ならば、その人間を嫌う派閥などでまとまりが取れない部分もあるが、世襲制ならば『当主の実子から』と納得できるし、波風もあまり立たない。

「ま、所詮ははみ出し者か」

桂の立ち位置は「『更識』を捨てた男の息子」である。だからなか桂は自らをはみ出し者と称している。だが、実際いくつかの任務を任せると完璧に仕事をこなしており、評価も年齢を考えると高い方である。

「すまん」

「いや、当主や奥方には感謝しているさ。戸籍も作ってくれたし、後ろ盾にもなってくれた。まあ、それだけでも大丈夫さ」

実際、当主とその奥方は桂の父親に負い目があったのか、自分に目をかけてくれて、今ではそれこそ冗談を言い合うほどに仲良くなっている。

「さあて、玉櫛と簪と遊んでくるとするか。つーか、俺としても次期当主は玉櫛がいいと思うぜ？ 所詮、俺は『更識を捨てた男の息

子』だからな。そのほうが余計な波風を立てなくて済む」

「……………」

手を振って部屋を出て行った桂を見ながら楯無は息を吐いた。世襲制にすれば組織にいらぬ波風を立てる。それは理解している。だが。

「それで、大事な弟を失った……………健二」

自分と弟は正反対だった。自分が活発なら弟は寡黙。自分が感動的な行動を取るなら弟は理論的な行動といった風に。そして、互いに切磋琢磨して実力をつけていった。最初はどちらかが当主になるな

どは考えていなかった。だが、高校生になったときに父親に知らされた。

『お前たちのどちらかを次期当主とする』

その日から、周りの空気が変わった。自分を取り込もうとする分家の連中や外部組織。二人で修行をしていれば擦り寄って来る者も居た。

だが、ある日のことだった。協力関係にあったロシアの諜報機関の隊長の娘との婚約話が伝わった。こちらは次期当主が決まっていなかったこともあり、三人で過ごさせてそのなかで決定するという取り決めになった。

「えっと…ナスターシャっていの。よろしくね？」

「えっと…更識健一だ」

「弟の健二です」

そして、実際に顔合わせとなったが、自分はナスターシャに一目惚れした。彼女の顔を見た瞬間に自分の心臓がうるさくなった。そして、彼女も自分を見て顔を赤らめていた。思えば、その時から弟は

気づいたのだろう。自分たち兄弟は平等にナスターシャにアプローチする事ができたが、弟はそれとなく自分とナスターシャが二人になれるように動いていた気がする。そして、ある日の夜。健二に話があると呼び出された。

「兄さんは…ナスターシャの事…好き？」

すごく真剣な目で自分を見据えていた健二。自分は一瞬呆けたが、すぐに表情を戻して告げた。

「ああ。好きだ」

これは偽りない真実。自分はナスターシャが好き。すでに彼女にも告白しており、キチンとOKを貰っていた。健二は自分の返事に頷くと口を開いた。

「分かった」

そして、それだけ告げると健二は自分の部屋に戻っていった。恐らく、この時すでに健二は『自分がどうするべきか』分かっていたのだろう。自分とは違い、冷静に状況を把握する事に長けていた健二だ。

「健一。お前が次期当主だ。健二は…家を捨てた」

翌日、父親から告げられたのは健二が最低限の荷物だけをもって更識を出奔したという事実。健二の部屋へと走ると、そこにはナスターシャがいた。

「健一…これ」

彼女が持っていたのは健二が自分とナスターシャに宛てたと思わしき手紙。そこには、こう書かれていた。

『兄さんとナスターシャへ。この手紙を読んでいるということは、僕が出奔した後だと思う。昨日　まあ、読んでいる日にもよるね。僕が出奔する前日に二人に別々に話をしたんだけど、その結果、僕がいないほうが色々な問題がないことが分かった。それに、兄さんとの家督争いっていうのもしたくないからね。まあ、家を出奔したのは申し訳ないけど、そろそろ派閥争いが本格化しそうだからね。僕としては兄さんやナスターシャが幸せならそれでいいかな？　とりあえず、ふたり仲良くね？　僕は僕で生きて行くさ。それじゃあ、お幸せにね？　健二』

それは勝手にもほどがある手紙だった。全て自分で考えて自分が『これでいいだろう』と勝手に結論づけて残された者の事など考えずに行動した結果の手紙。だが、分かるのは『兄弟で争いたくない』という気持ちと『兄の幸せを願う』という弟の気持ち。

そして、出奔した弟が幸せであるようにと妻となったナスターシャと祈っていた。部下を使って秘密裏に調べていた。だが、健二自身が情報を改ざんしていたため、ようやく足取りがつかめた時には、先日の飛行機テロで死亡したことで絶望した。だが、息子が居た。最近、東京の裏路地に身元不明の子どもが現れた。何でも噂では、先日起こった飛行機テロの生き残りらしい。その情報を聞き、駆けつけた。そこに居たのは、弟の面影を遺した桂だった。

結局、弟の結婚を祝うことも出奔した時の恨みを晴らすこともできなかった。だから、せめて弟夫婦の忘れ形見を引きとって自立できるまで育てようと思った。そして、桂の才能に気づき、桂を次期当主候補に挙げたのだ。

「……桂には悪いが、出来ればあいつに『楯無』を継いで欲しい」

そうすれば、自分たち兄弟のような事は起こらない。自分の娘達が険悪な仲になることもない

「勝手だな」

そして、それが確率の低い願いである事も理解している。多分なのだが、桂はしばらくすればここを出ていきそうな気がする。今は、娘たちの世話が楽しいようで色々教えているが、それも一段落つけば「はみ出し者」を自称しているのだ。ここを出て行くだろう。

「なら…その時に便宜をはかるのもいいかもな」

それならそれでいいかも知れない。その時は…まあ、後悔しないようにはしたい。楯無はそう思っていた。

しかし、この数年後に一人の天災により世界のパワーバランスが崩れ、世界が変革し、桂もある任務で片腕を失う事件が起きることになった。

第2話 流されて更識（後書き）

とりあえず、現状の確認的な話。

というか、あれですね。HDクラッシュして数日経ちましたが、何というかクラッシュしたというのを実感しても「ああ…そうか」という賢者モードみたいな思考になりましたね。

とりあえず、クリスマス用の短編を幾つか考えてモチベ回復を図ろうと思います。

第3話 『白騎士事件』の存在による雑事

「はあい！ レッツルッキン！ 次のうち仲間はずれはどれでしょう！」

桂が示したボードには四つの絵が書かれていた。ライオンと人間とサメとスズメ。桂は現在、妹である玉櫛と簪、そのお付きである布仏虚と本音姉妹相手に遊んでいた。

「えっと…サメですか？ それ以外は陸上に住んでいるし」

「虚ちゃん……惜しい！ 正解は人間です。人間以外は食べます」

「……え？」「……」

「ぶつちやけるとスズメも食べないことはない。ただ、人間はなあ」

「あの……兄さん？」

「ちなみに、スズメはしっかりと焼かないとだめだぞ？」

「あの……桂さん。別に誰も聞いていませんよ？」

スズメの調理法に話がシフトした桂を見ながら四人の幼女は大量に汗をかいていた。このままここにいと知ってはいけないことを知っていきそうになる。

ちなみに、桂は性格が変わった。以前は、寡黙で物静かだったのだがいつの間にか飄々とノリが軽くなった。楯無は理由を「人と触れ合ったから」と推測していたのだが、実際は違うようである。

「桂。少しいいか？」

「ん？ 今、サバイバル知識の伝授を「任務だ」…了解」

「……（助かったー！）」「……」

四人の幼女は揃って息を吐いていた。それをみて桂は「るー」と泣いていた。

「さて、仕事というのはIS関係のことだ」

楯無に連れられてやってきた部屋。そこで、告げられたのは日本政府から「IS開発者である篠ノ之束の『数少ない』親友である織斑千冬とその家族の護衛」という依頼だった。

「で？　なんで、俺にお鉢が回ってきたんです？」

桂は基本的に単独行動を取っている。他の構成員との折り合いが悪いのもあるし、何より桂自身が単独行動によるゲリラ戦術を得意とするためである。

「うむ。実は、織斑千冬からの指名らしいぞ？　お前…生きていたこと伝えていなかったんだらう？」

「あゝ。ということは、束が調べていたか」

自分が生きていたことを千冬たちに伝えていなかったのは、特別な事情があるわけでもなくただ「忘れていた」というだけ。

「まあ、」指名ならやりましようかね。ちなみに、銃火器の使用は？」

「……ナイフのみだ」

さすがに銃火器はごまかしが効かないらしい。それくらいやってくればいいのかと思いつつも準備をするために部屋を出て行く桂。

数ヶ月前に世界を変えた「IS インフィニット・ストラトス」と呼ばれるマルチフォームスーツ。それを発表したのは、幼なじみの束だった。桂は要人警護の任務でその発表の場に居たのだが、簡単な説明を受けているうちにISがどのようなものか分かった。

「まさか、母さんに見せていた設計図があれとはね……」

母親の病室で試行錯誤していた設計図の完成形。それがIS。となると、その数日後に起こったハッキングにより日本に放たれた大量のミサイルとそれを鎮圧したIS『白騎士』を捕獲しようとした各

国軍との戦闘の総称である『白騎士事件』の白騎士は　　。

「千冬だな。つーか、あのバカども。やるのは勝手だが、後始末をするのは俺たち暗部なんだよ」

日本に飛来したミサイル。白騎士により半数を撃ち落されたが、残りを落としたのは『更識』や自衛隊。とにかく、フレアやらなんやらをばらまいてミサイルを爆破していったのだ。

「それを千冬のバカが……」

自衛隊の戦闘機がフレアをばらまくために白騎士を通りすぎようとした際に翼を切り落としたのだ。幸いにもミサイルが着弾したのは開発中だった臨海エリアだったため人的被害は無かった。状況が状況のため仕方ないのかも知れないが、それならばそんな事件を起すなど言いたい。

「それで助けを求めるか……ま、金さえ貰えればなんでもいいか」

桂は部屋に戻ると装備を整えて歩き出した。途中で、仲の良い連中から土産を頼まれつつ屋敷を後にした。

「んで？ 満足か？ こんな世界で」

「……分からない」

織斑家に向かうと、そこに群がっていたマスコミなどを「脅して」帰らせると家の中に入り、千冬の会話を始めた。

「お前らに色々言いたいことはあるが……俺は公私混同はしない主義なんでな」

そう言つて、盗聴器などが仕掛けられていないかをチェックし始めた桂。千冬はその背中をただ見ていることしかできなかった。

「……これからお前と束はツケを払うことになる。世界を変えたんだ。尊敬されることもあれば恨まれることもある。それを理解することだな」

「……お前は？」

それは一連の騒動で理解した。だが、聞きたかった。桂はどう思っているのか？　ISを開発したことをどう思っているのか。仮にも桂の母親が関与しているのだ。それを聞きたかった。

「別に？　俺は世界から弾かれたからな。人権も、今話題になっている女尊男卑の風潮もどうでもいい」

飛行機テロでたった一人生き残った事、その後戸籍がないまま裏の世界で生きてきたこと、『更識』での立場。その他様々なものが桂に『世界から弾かれている』と判断させた。

「と、というより、聞くくらいならするな」

盗聴器をいくつ回収し、それを一つ一つこの諜報機関が設置したのかを調べながら会話をする。桂の中では千冬たちが世界を変えたことをとやかかくいうつもりはない。ただ、自分たちの仕事が増えたので文句を云っているのだ。

「まあ…なんかあったら言えればいい。幼なじみということで格安で色々引き受けよう。汚れ仕事から何からな。あ、それと俺はもうそろそろ外国行くから」

「どついつ事だ？ 『更識』を抜けるのか？」

そもそも暗部組織から離脱することができなのか不明なのだが、桂は近いうちに再び姿を消すと言っているのだ。

「日本に戻ってくるときに世話になった人が、今度設立されるIS委員会の理事になったからな。直下のエージェントとしてスカウトされているんだよ」

ISの管理などを目的として設立されるIS委員会。世界から集められた各国代表より構成される委員会。その委員会のイギリス代表として選出されたアイザック・アルバートからスカウトを受けている。元々はドイツの企業の社長だったが、IS台頭による情勢変化を察知し、職を辞して母国であるイギリスに帰還。その後は、知り合いのツテで諜報機関やらイギリス王室直下の警備隊などを流れ歩いてその才覚を認められて委員会への代表に選出された。

「なんつーか、気に入られていてな？」

日本に戻ってくるときはイギリスに戻る直前だったらしく、その後も連絡を取り合い色々融通してもらった。思えば『更識』よりも強固なコネを作れた気がする。

「『更識』での俺の立ち位置は「家を捨てた宗家の落ちこぼれの息子」だからな。居心地が悪いのよ」

無論、父親が落ちこぼれということは絶対にありえない。むしろ、『更識』から逃げ続けていた点を見れば十分すぎるだろう。

「義理の妹もできたが……どーも、組織に縛られるのは面倒だと感じた」

その点、アイザックは「目的のためなら人質もとるし、暗殺もする」男。ソッチの方が良さそうだ。無論、玉櫛たちが可愛くないわけではない。だが、どうにも『合わない』のだ。それはやはり、世界から『弾かれた』と感じたあの飛行機テロの事件がきっかけなのだろうと判断していた。

「どうせ死ぬはずだった人生。自分の好きなように生きなけりや損だろ。お前もそのくらいの考えていけばいいんじゃないかね？」

「できるわけがないッ！　一夏もいる……」

「ブラコンもいいけど……ま、言わないでおこうか」

桂は昔から千冬はブラコンだと思っていた。といっても、昔は両親

がない故の過保護さと判断していた。しかし、今は千冬は一夏に依存しているように思える。恐らくは、一連のIS関連の自体で追い詰められているのだろう。

「とりあえず、少しは一夏を　　ッ！　伏せる千冬！」

「え？」

殺気を感じた桂は千冬を押し倒した。そして、そこに撃ち込まれたのは銃弾。入ってきたのは一人の人影。見た感じ、訓練された軍人のようである。その男はライフル銃を持っている。装備がナイフしかない桂は状況の悪さを呪った。

「チツ、どういう事だ？　周囲は各国の諜報機関が固めていたはずだろうが！」

「桂、それは本当なのか？」

桂の毒づく声に千冬が声をあげる。桂は、腰からナイフを取り出すのと同時に懐の携帯から『更識』へと緊急事態を告げる通信を送る。

「当たり前だろうが！　お前と束が『白騎士事件』の首謀者だというのは各国上層部の共通見解だ。あんまり『国家』をナメるな！」

「織斑千冬…貴様のせいで私の妻がア！」

男はそう叫び、ライフルを千冬へと向けた。幸いにも、桂が抱えて飛び退いたおかげで千冬に怪我はなかったが、千冬は完全に恐慌状態に陥っていた。桂が殴って気絶させたため声はすぐにおさまったが、桂は内心そうしておいてよかったと感じた。

「おおかた、どっかで『白騎士事件』の真相を知ったか。そういや、ミサイル着弾の衝撃で階段を降りていた妊婦が転落して胎児共々死んだとか聞いたな…その遺族か」

「そうだ…その女のせいで！」

ミサイル着弾地点の数キロ先にあった団地地帯。衝撃というよりも、ミサイル落下の音に驚いて怪我をした人間が結構な数居たのだ。『白騎士事件』のインパクトが強かったため公には知らされていない事実。

「まあ、アンタの身の上にも思うことは色々あるが…悪いな。こいつを殺させるわけにはいかないんだよ」

「何故だ！？ そんな女を生かしておく必要がどこにある？」

「そんなん知らんがな。こっちは命令を受けているんだから」

桂は周囲にいるはずである各国諜報機関の人間を本気で呪いたくなってきた。

「各国諜報機関が動かないのは……装備がないからということにしておこう。考えるのは面倒だ」

篠ノ之束への脅しのためなど大体の予想は付いているが、今は千冬を守るのが最優先されるべき事項。しかし、ライフル相手にナイフで挑むのは。

「さすがに分が悪いな……しかも、あのおっさんもう錯乱状態だろ」

「妻の……娘の仇だ！」

しかも、こちらには千冬がいる。戦いにくいにもほどがある。

「つーか、CIAでもGSG-9でもいいから仕事しろよ。目の前で人が死にそうに……無理だな。そんな自国の不利益にしかならぬいことをするわけがねえ」

最悪、腕の一本でも犠牲にするしかない。というより、さっさと片付けなければ援軍が来たときに不測の事態が起こる可能性が高い。例えば、錯乱した男がライフルを乱射など。

「ま、なるようにならあね！」

「死ねえ！」

桂に気絶させられた千冬が目を覚ましたのは銃声だった。目を開くと目の前にボトリと落ちてきた左腕。顔を上げると、男の喉にナイフを突き立てている。『左腕がない』桂だった。

「妻の……子供の仇を……」

「ハッ……知るかよ」

「あ
」

千冬は男を殺してその場に崩れ落ちる桂の姿だけを見ていた。

目につくのは『赤』

第3話 『白騎士事件』の存在による雑事（後書き）

次回より、主人公が本格的に動きます。

白騎士事件の裏側についてはまあ、捏造です。そして、千冬さんは原作より弱体化します。能力ではなくメンタル的に。

ちなみに、ヒロインはMを^{ドラ}カ預定しているんですが、シャルもいれて二人のヒロインにしようかなと思っっている作者です。だって、シャルもある意味ねえ？

第4話 流れ流れてアイザック

「行くのか？」

「ああ。元々、そろそろここから離れるつもりだったしな。心配しなくても、パトロンはいるさ」

簡単な荷物を持ち、トレンチコートを着ている桂は、屋敷の廊下で楯無と会話をしていた。

「元々俺の『更識』入りは歓迎されていなかった。そんなときに俺が左腕を失った。追い出すにはいい口実じゃないのか？」

任務を失敗したわけでもない。むしろ、織斑千冬の護衛という任務は完全に果たしている。しかし、古参の人間は納得しなかった。というより、難癖をつけて桂を追いだそうとしているのだ。

「まあ、あの爺どもにとつちゃ俺は邪魔者だろう。どうせ玉櫛の後ろ盾にして利益を得たいんだらうよ」

「情けないな。いや、組織が腐敗するのは当然か」

要するに桂は邪魔なのだ。日本政府からも桂を指名してくる者もいる。有能すぎる桂の手綱を取ることが難しいと判断した更識の幹部は今だ子供の玉櫛を次の楯無としようとしている。

「まあ、玉櫛がそんなタマじゃないのは分かるけどな」

「あの子は聡いからな。いずれ爺様共も思い知るだろうよ」

二人してくつくつと笑う。老獺と言えば聞こえはいいが、所詮は自分の利益を守ろうとしている老害である。ひとしきり笑うと桂は存在しない左腕を一瞥すると鞆を持ち歩き出した。

「すまん。だが、何かあれば言ってくれ。私に出来る範囲で協力する」

「いって。アンタは嫁さんと娘を守ればいいんだよ。男一人、適当に生きていけるさ」

何より一国の暗部組織に過ぎない『更識』よりも強大な人間の専属エージェントになれるのだ。それこそ難癖をつけてきた女など逆に牢屋にぶち込めるだけの権力を持った人間の専属エージェントに。

「それじゃあ、玉櫛たちには適当に言っておいてくれ。まあ、そんなに深く付き合っていなかったから大丈夫だろうけどな」

そう言い残し桂は闇夜にまぎれて『更識』より姿を消した。

「そう思っているのはお前だけだよ。玉櫛も簪も、虚も本音もお前を目標にしていたのだ」

確かに、実際に会ったのは数えるほどだろう。しかし、彼女たちはその数回で桂の能力などを見抜き、目標としていた。

「時間が重要ではない。密度が重要なのだよ。しかし……これは玉櫛たちが暴れそうだな。いや、それはそれでいいのか？」

桂を尊敬していた玉櫛が『楯無』となればどうなるか。老害どもはもう少し『若者の考え』を理解するべきだろう。

「しかし、情け無いにもほどがあるな私は」

また止めることはできなかった。弟の時よりも前進はしていたが、結局行かせてしまった。本当に馬鹿な男だ。楯無がそう自嘲するところからか声が聞こえてきた。

『まあ…桂はああいう子だからねえ。組織に縛られるより、個人のエンジニアとして動いたほうがいいでしょ。だから、気にしなくてもいいよ』

「……………そう、か」

幻聴かもしれないが弟の声が聞こえてきた。だが、楯無はそれが幻聴ではないと確信していた。

「……………んで？　これ何よ？」

「義手だ。ISの技術やその他諸々の技術を使った特製のな」

『更識』を後にした桂は数ヶ月中国の崑崙山にて修行を行った後、イギリスはロンドンにいた。パトロンにして上司であるIS委員会イギリス理事のアイザックと久しぶりの対面を果たしていたのだが、そのなかでアイザックに渡された物。それは、如何にも『機械の腕』と呼ぶにふさわしい義手だった。

「もちろん、お前にもその義手を接続するための手術を受けてもらう必要があるがどうする？」

「面白そうじゃん。やってくれ」

「フツ。お前ならそういうと思っていたよ」

その手術は数時間にも及んだが、桂は手術後も寝ることもなく義手の調子を見ていた。

「結構…いい感じだな。フーか、触覚がないのを除けば生の腕より調子がいいかも知れないな」

「一応、現時点での世界最高レベルの技術を使用しているからな」

桂の賞賛にアイザックは事実を告げる。そして、その義手をおくってきたのは篠ノ之束だと。

「どづいう事だ？」

「まあ、お詫びだそうだ」

曰く、自分の見通しが甘かったせいで左腕を失うことになった桂へのお詫び。桂は思うこともあったが、もらえるものはもらう主義なので素直に感謝しておいた。

「ちなみに、その義手は多種多様な運用を視野に入れて作られている。専用のカートリッジで変形するらしいぞ？」

「ほー。基本形態はこの状態か」

「お前が会得したという『電磁発勁』を補助するためのダイナモ。及びそれを利用したソナーや発熱装置。それが基本の状態だ」

中国の崑崙山に居た老人に教えてもらった『電磁発勁』はISの絶対防御すら透過する技だった。ただし、左腕を失ったことによる人体の気が流れる道『経絡』や気の流れ自体が乱れているため、使用すれば体への反動があるものだった。そのため、それを補助するブ

「スターとしてのダイナモが装備されている。」

「地上戦・至近距離ならばISを破壊できるお前の能力を腐らせるわけにはいかないんでな」

「だろうね」

ISに触れなければならぬとはいえ、ISを破壊できる術を持つ桂。その戦力を有するアイザックは自身の目的を桂に話し始めた。桂を完全に協力者とするために。

「私は今の女尊男卑を変えたいのだ。軍内の再編が行われたのは時代の流れだ。しかし、それに伴う女尊男卑の風潮は変えなければならぬ」

アイザックはISが世に出たのは運命だと思っている。かつて、戦車がより高性能の戦車に取って変わられたように、新人が旧人を駆逐して分布を広げたように。

「だが、片方がもう片方を隷属するという状況……実に似ていないか？ かつてのドイツによるユダヤ人迫害のように。アメリカに入植した白人が先住民を壊滅させたように」

「つまり、今の『男が女に隷属している』状況を改善するのかわ？」

「うむ。協力してくれるか？ もし、協力してくれるのならば……私の全てを持ってお前の願いをかなえてやる」

アイザックは子爵家の次男。家自体は兄が継いでいるが、兄弟仲はよく『手段を選ばない神算鬼謀』とイギリス国内で恐れられているアイザックをして「兄上は……私以上の策略家だよ。自覚はないだろうがね」と言われるほどの「お人好し」の兄のサポートがある。そしてなによりアイザック自身がそれだけの権力を持っている。恐らく、大半のことは実現可能だろう。

「……へっ。面白い。のってやるよ。俺の望みはそんなにない。なんか頼みごとがあったらそれを出来る範囲で叶えてくれるだけでいいさ」

「ふむ……欲が少ないな」

「なんかさあ……一度死にかけたせいかな？ 必要以上の物欲とかが薄いよ」

「……まあ、いいがね」

どうせいずれ『欲望』が強くなるだろう。例えば、『同類』を見つけた時とか。とりあえずは、大事な部下にして協力者の意向を叶えることを優先させた。桂が頼んだ『ISと斬り合っても欠けることのない日本刀』を造らせるために。

「兄さんが、ねえ」

それは少し時を遡る。桂が『更識』を抜けたと自分の従者と妹とその従者に父親から知らされた事実。その時に父親から桂が消えた理由を聞いた。

「ふうん…そつかあ……自分たちの利益がなくなるからかあ……」

「お、お姉ちゃん？」

怯えるような妹の声に気づいたのか玉櫛はすぐに表情を戻し、簪の頭を撫で始めた。

「大丈夫。かんちゃんはお姉ちゃんが守るから」

そして、自分の従者とその妹にも微笑を見せる。何も心配はいらないのだと告げるように。しかし、その内心はマグマのように煮え立っていた。

「（兄さんを排斥するなんて…ただ後ろで指示を出すしかできない老害がやってくれるじゃない。暗部組織が優先すべきは能力でしょ）」

義兄が行なってきた任務は自分が成長してISを所有したとしても実行出来るか怪しい。父親が連れてきた義兄。義兄は強かった。そんな義兄に憧れたし、義兄が『楯無』となったらそのもとので存分に力を振るいたいとも思った。だが、それももう叶わない。

「でも、私が『楯無』になれば……」

義兄も戻ってこれる。玉櫛はそう考え、簪たちを老害どもから守るためにも力をつけることを決めた。

惜しむらくは、桂自身に『更識』に戻ってくるつもりがないことだ
らう。

第4話 流れ流れてアイザック（後書き）

クリスマス？ 何それ美味しいの？ 自宅で、友達と桃鉄しながらピザ食べますが何か？

さて、ということでもそろそろプロローグも終わります。次回は、メインヒロインの登場です。さて、誰でしょう？

あと、シャルがもう一人のヒロインというのはどうでしょう？

第5話 新天地での初任務

「大将。戸籍一つ用立ててくれ」

「ん？ どうした？」

ある日、アイザックから与えられていた任務を終えた桂が、アイザックがいる屋敷へと戻ってきた。そして、背負っているのは一人の少女。

「ふむ…桂。いくら女に飢えているからと言って「ちげえよ」「そうか」

アイザックはとりあえず、少女が日本人らしいのでそれ用の戸籍を用意しつつ事情を聞き始めた。

「……寒い」

桂は現在、ロシアのツングースカにいた。というのも、アイザックがツングースカにおいて非合法研究所が存在するという情報をつかみ、その研究所の調査をアイザック経由でIS委員会より命ぜられたのだ。

「やっぱりウオツカってロシア人に必要なのがよくわかったわ」

スキットルに入ったウオツカをちびちびと飲んで、ピロシキを頬張って件の研究所を双眼鏡で見る。

「しかし…あの研究所って何よ？」

あのIS委員会ですら全貌がつかめなかった研究所。桂単独で行動するのも、被害を最小限に抑えたいとの思惑があるのだろう。例えばISでも、室内戦ならばそのアドバンテージは存在せず、ISを触れるだけで破壊できる電磁発動を持つ桂に利がある。

「さてと、行きますか」

白いコートを取り出し、雪原の中を進む桂。少しずつ研究所へと近づいていく。

「……赤外線センサーの類は無し……ソナーにも反応なし」

束が送ってきた義手は凄まじい性能を持っていた。『タケミカヅチ』と名付けられているこの腕は、その名の元となった武甕槌大神の伝承にあるように形や性能を変える義手。現在、桂が使用しているのはソナーやレーダーなど索敵に特化した『レーダーアーム』。単独行動大好きな桂にはうってつけである。

「さてと……行くか」

右手にオートマチックタイプの拳銃を持ち音もなく研究所を駆ける桂。目指すは研究所の中枢。何かしらの情報を持ち帰らなければおまんまの食い上げである。

「つーわけで、死んでくれや」

「モゴッ
」

偶然見つけた研究員らしき男の背後に忍び寄り、腰のホルスターに拳銃をなおすと右手で男の口を塞ぎ、指の部分が鉤爪のように変形した左手でその首を搔っ切り息の根を止めた。

「マジで便利すぎる。これ本当に義手なんだろうな？」

腕型ISなのではと思ってしまっほどに性能がよすぎる義手に驚きながら男の身ぐるみを剥がし始める。IDカードの名前と写真を『レダーアーム』のカメラで撮影しつつソナーで辺りを探る。そして、ある部屋から数人の話し声が聞こえてきた。さすがに内容などは聞こえなかったが、居場所を探るには十分である。

「そんじゃあ…行くか」

拳銃の調子確かめつつその部屋の前まで移動すると、ソナーで再び音を調べ始めた。

それじゃあ、約束のものだ。

ハッ。男のくせにいい仕事をするじゃねえか。

クックック。

「（丁度研究成果の引渡しの場合か？だが、ロシアが非合法研究をしているという噂はなかったはず。いや、むしろロシアの求心力を低下させる勢力という線もあるか）」

そもそもロシアも多民族連邦国家である。決して一枚岩ではない。そう考えると選択肢は大量にある。

「（まあ、それは俺が考えるべきものではないな）」

あくまで桂はエージェントである。情報の判断などはアイザックが行う。自分は情報を持ち帰るだけ。

ところで、そこにいるネズミは誰だよ！

「……あります。ISを装備していたのかよ」

「ちっちと出してごよー」

そう言われたので鋼鉄の扉を蹴り飛ばして部屋に入った桂。さすがに生身で鋼鉄の扉を蹴り飛ばすのは意外だったのか中に居た三人の男女も目を丸くしていた。

「ちーす。IS委員会のエージェントの高槻桂でござい」

どごそのや 夫のように声をかけた桂はざっと敵を見た。女が二人に老人がひとり。女二人はISを装備していると仮定して、どうやってここから逃げるか考えていたのだが、老人が拳銃をこちらに向けたので、とつさに左腕をレーザーライフルに変形させてその頭を撃ちぬいてしまった。

「ヒューー じゃねえ。やっちまった」

思わずサイコガンを持つ一匹狼の宇宙海賊を称するような声を上げたが、左腕からの光学兵器。あながち間違いでもない。しかし、そのせいで女たちの警戒レベルを跳ね上げてしまったようで二人ともISを展開していた。そのISは両方共『強奪された』IS。

「あ？ アメリカ製の第2世代の『アラクネ』にイギリス製の第1世代『エンフィールド』だな。強奪品をそのまま使うか……ふうむ。ま、室内だしなんとかなるか」

「ナメてんのかテメエ！ 男のくせによお！」

アラクネを装備している女はあからさまに桂を見下しているが、桂はそんな女を冷めた目で見る。

「ああ…アンタ三流か。なら仕方ないわな。んじゃま……テメエらをしよっぴかせてもらっせ」

「んだと!?!」

「男だろうが女だろうが『裏の人間』なら能力で判断するのが常識。つまりそれすらできねえテメエは三流だよ！ ISの名前も『アラクネ』じゃなくて『アバズレ』に変えとけや！」

左腕を通常状態に変形させると、そのまま殴りかかった。といっても、無策ではない。相手が激昂しているからこそ、そして見下しているからこそ桂に分がある。

「紫電掌！」

「んな!?!」

左腕がアラクネの脚に触れた瞬間、脚内部に高圧電流が打ち込まれ、脚は内部から爆発した。通常ならばありえない事態。しかし、アラクネの操縦者は状況をすぐに判断すると僚機に声をかけた。

「エム！ 撤退する。テメエは「足止めをする。こっちはBT兵器がある」わかってんじゃねえか」

アラクネは脚部だけではなく全体に電流が流れたため細部に不具合が出始めた。一方エンフィールドは無傷。足止めには十分だろう。アラクネは天井を破り最高速度で離脱し、エンフィールドは今だ試作型で決して性能がいいとは言えないBT兵器を2基射出すると桂に向け飛ばしたのだが。

「あーらよつと」

桂が左腕を広げると、BT兵器は「磁力に引つ張られる」かのよう
に2基とも左手の中に吸い込まれ、桂により握りつぶされた。

「まあ、鉄製だからな。これも『電磁発動』の応用だ」

左腕を強力な電磁石へと変え、BT兵器を吸い寄せる。エムと呼ばれた少女は桂の底の知れなさに知らずのうちに後ずさっていた。そして、そのような自分に気づきぐせんとしていた。

「私が……恐れている？」

「まあ、世界は広いからねえ。気にしなくてもいいんじゃないかな？ とりあえず、君捕縛ね」

エムが何かするよりも早く桂が動いた。左腕を床に付けるとエンフイールドが高濃度の電磁パルスが発生したと報告し、システムの大半がダウンしはじめた。

「な……まあ、眠つといてくれや」「え？」

いつの間にか自分の鳩尾に左腕を当てていた桂。次の瞬間、エムの意識は暗転した。

「ん？ 吐血？ 内臓には負担がないように電力調整をしたはずだが……」

吐血どころか耳や鼻からも血が出ている。一応、調べてみるとナノマシンの死骸であることが判明した。

「……持ち帰るか。色々事情を聞かなきゃならんし」

待機状態に戻ったISを回収しつつ、エムを担いで研究所のコンピ
ューターからデータを一気に吸い出す桂。左腕大活躍である。

「そんで今に至る」

「……なるほど。しかし、研究所のデータは微妙だな。非合法では
ないといえばそうなんだが、な」

桂が持ち帰った情報は、グレー部分の研究が多く問題がないと上が
判断すればそれでお終いになるような情報だった。

「せいぜいこの…^{リムパー}剥離剤か？ コレくらいしか有用なものはないな」

「ふーん。お？ 大将、目を覚ましそつだぞ」

左腕をマシンガンに変形させ、エムに突きつけながら目をさますの
を待つ。アイザックはそんな左腕を見て改めて『天災』の技術力の
高さを思い知る。

「ん……」

「グッモーニン？ とりあえず、知っていることを全て話してもらおうか」

「…ふむ。桂と同じ身の上か？」

「私は……それに、ここは……」

エムは現状が理解出来ないようで、必死に記憶を探っているようだった。

「それと、お前の体から出てきたナノマシンについても話してもらおうか？」

「え？ ナノマシンが？」

「クソツ…あの糞野郎が…スコール。エムの馬鹿はまだ帰って来ないのか!？」

「ナノマシンの反応がなくなっただわ」

二人の女性が薄暗い部屋で会話をしている。片方は、アラクネに乗っていた女性。その女性は桂への悪態をつきながら傍らに立つ女性スコールに声をかける。そして、返ってきたのはエムに投与していた『首輪』の反応が無くなっているということ。

「おい待ってくれ…それってあの馬鹿が死んだってことか？」

「そうでしょうね。その高槻桂とかいう男……要注意しないとね。オータム」

「分かってるよ。あのヅラ野郎はアタシが殺してやる」

アラクネの操縦者オータムに目をつけられた桂。オータムと再び相まみえるのは数年後の事だ。

「……ん？　今、何か不本意な呼ばれ方をしたような」

「お前意外と余裕だな？」

銃を突きつけつつ何かを察知した桂。こいつも大概である。

第5話 新天地での初任務（後書き）

万能な腕。ライダーマンのカセットアームつか、ガイキングの超兵器ヘッドつか。ところで、なんでライダーマンの腕って左腕から右腕になったのだろうか？ やっぱアクションの関係ですかね？ 別にいいけど。

さて、メインヒロインが出てきました。皆わかったかな！？（棒

基本的にはこの二人で行動します。シャルは現在考え中。シャルはヒロインにしようと思います。そこで質問、お母さんをどうしましょう？ 生存させるならば、アイザックがシャルのお母さんに恋していて〜とかいうストーリーが思い浮かんだのですが……多分、アイザックVSデュノア社長になる……面白そうではあるな。

PS・作者はお酒は結構好きです。出身の関係で芋焼酎が好きですが、カクテルも好きです。飲むのはスクリュードライバーやバラライカなどのウォッカベースが大半です。お酒は二十歳になってからですよ？

12月29日 サイレント・ゼフィルス エンフィールド、その他
修正

第6話 二人のはみ出し者

「私は……マドカ。亡国機業のエージェントだ」

「亡国機業？ 大将、ナチスの残党ってまだ残ってんのか？」

「残ってはいるが、ナチス残党とは限らん。それより、続けてもらおう」

ナノマシンが体から排出されたことで、マドカはなにやら声を上げたがすぐさま冷静になると桂たちの事を聞き、状況を理解したのか投降してきた。そして、現在桂とアイザックにより尋問中である。といっても、マドカ自身が協力的なため食事や飲み物を用意してさながらお茶会である。

「すまない。私は…末端に過ぎないから全貌は知らない。ただ、多国籍の秘密結社だというくらいしか」

何よりマドカ自身が参加して日が浅いため大した情報も持っていないらしい。桂はマドカの顔が干冬と瓜二つなためクローンやその他の問題を考えていたが、どれも推測でしかないため余計な口出しはしなかった。

「まあ、それはいい。貴様はこれからどうする？」

「え？」

「私は駒を必要としている」

アイザックは自身の目的を話した。その上で協力するならば、戸籍も用意するし、所有しているエンフィールドも『強奪』されたというところをもみ消すとも。

「まあ、断ったら地下室行きだな」

そして、待っているのは拷問かもしくは捨て駒としての未来だろう。マドカはそこまで分らないほど馬鹿ではない。

「……わかりました。貴方たちに従います」

選択権など最初からなかったのだが、それを差し引いても破格の条件とも言える。

「ふつ。桂、この少女は「高槻マドカ」として戸籍を作る」

「俺の妹にすんのか？」

「…安心しろ。結婚できるように従兄弟で偽造しておく」

「おいこら」

後の教育などは桂に任せると告げ、アイザックは部屋を出て行った。

「まったく…あのオッサンは……」

アイザックに悪態を付きつつ、マドカに向き直る。

「さて、とりあえず……」『はみ出し者』同士仲良くしようぜ？」「

桂が差し出した右手をマドカはおどおどしながらとった。『すでに死んでいる』桂と『生きている証がない』マドカ。似たもの同士の二人がこの時出会った。

「まあ、やることは変わらないけどね」

「そうなの？」

桂から自分たちの仕事の説明を受けていたマドカ。桂自身も仕事を整理するつもりだったので丁度良かった。ちなみに、今いるのはアイザックの屋敷にある桂の部屋である。桂自身の物欲が薄いためベッドと小型の冷蔵庫、報告書作成用のパソコンを置く机くらいしかない殺風景な部屋。しかし、アイザックより「部屋は監視の目的もあるから相部屋」と言われたため、色々買い足してメイドなどに女用の小物などを買ってきてもらってそれなりにいい部屋になった。

「基本的に、大将…アイザック・アルバートの指示で俺達は動く」

そして、カーペットの上に座ってマドカに説明を始める桂。名目上桂はIS委員会直下特務機関所属のエージェントである。しかし、実態はアイザック専属エージェント。

「まあ、大将自身がIS委員会を手中に収めるつもりらしいんだがな」

「可能なのか？ さすがに…難しいと思うんだが」

「何でも『利権と保身が確保出来れば別に構わない連中』らしいぞ？」

ISで女性の地位は向上し、男性は隷属を余儀なくされている世界になった。しかし、それは一般階級のみ。イギリスならば貴族社会、アメリカならば支配者層といった世界では相変わらずの実力・階級社会。そして、その世界からIS委員会の理事に選出された者たちは利権と保身の手段が確保出来れば構わない。アイザックはそこにつけこんでいるのだ。

「俺の予想では…後数年もしないうちにIS委員会を自分のものにするな」

「……………」

アイザックの「弱み？ 無ければ作れ。目的のためならば手段を選ばぬ」なやり方を知っている桂としてはIS委員会を手中に収めるアイザックの姿が簡単に想像できた。

「まあ、それは置いておいて。俺達の仕事は一言で言えば『何でも屋』だ」

「それはあなたと出会った件からも分かる」

桂と会うことになったロシアの一件。そこから想像できることは正しく『IS委員会の狗』として汚れ仕事などをするということ。まあ、マドカも元秘密結社エージェントとして色々やってきたので別に忌避感はない。

「とりあえず、現時点ではIS関連研究の内偵や要人警護、そして…反動勢力の壊滅などを行う事になる」

ISによる世界情勢への不満を持つ者、ISを使用して国家転覆を狙う者などひとえに反動勢力と言っても無数に存在する。

「とりあえず、俺らの仕事はそんな感じ。他に聞きたいことはあるか？」

「それじゃあ…アラクネの脚を破壊したあの技は一体なんなんだ？」

マドカはずっと気になっていた事を聞いた。ツングースカの研究所

でアラクネの脚部を破壊した技とその左腕。それがどのようなものなのかずっと気になっていた。

「左腕は義手だ。一応「タケミカツチ」という名前だな。篠ノ之東より送られてきた一品だ」

「なるほど…で、あの技は？」

束が作った義手ならば、あそこまで構成のものも納得できた。では、あの技は一体？ マドカは桂に問いかけた。

「技…というか、あれは『電磁発勁』と呼ばれる技を応用した掌底だな」

「電磁発勁？ 気功の一種なのか？」

発勁といえば中国拳法などでよく聞かれる事。マドカ自身そこら辺は詳しくないため「発勁＝気功」という式が出来上がっている。

「ん…まあ、そんな感じでもいいわ。とりあえず、俺は生身で電気を発生させることができると考えてくれ」

ぶつちやけ面倒になったため「発勁」気功」で押し通すことにした桂。さつさと説明を済ませようという魂胆らしい。

「本来なら隻腕のせいで経絡などに欠陥があるため体に反動が来るんだが、俺の場合はこの義手に搭載されているブースター代わりのダイナモのおかげで反動なしで使用できる。ちなみに、ISの『絶対防御』すら透過するぞ?」

恐らく『電磁発勁』により発生する電気が生体電流であることなどが関係しているのだろうが、詳しくは分からない。ただ、分かるのはISがどれだけ強化されようとも『電磁発勁』はISに対して絶対的な力を持つということ。

「といっても、だれでも使えるわけではないらしい」

「え? そうなのか?」

桂は、自分に電磁発勁を授けてくれた崑崙山の老人を思い出していた。

若造。お主は…俗世に未練がないのう。俗世から弾かれたと考えているから儂を見つけられたのかも知れんな。どれ、少し手解きをしてやろう。

「……あれ？ あの爺さん、もしかして仙人？」

「貴方は何を言っているんだ？」

あの時は別になんとも思わなかったが、冷静に考えると崑崙山に老人がいるのはおかしい。崑崙山に村でもあれば別だが、わざわざあんなところに村を作るわけがない。

「……そっぴや、崑崙山って仙界への入り口とかいう説があったな」

となると、あの老人はやはり仙人？ 落ち着いて考えて見れば、呂尚とか名乗っていた。確かそれは太公望の本名だったはず。

「……」

考え込む桂を見つつマドカはふと自身のことを考え始めた。自分は気づいたら『エム』として生かされていた。エンフィールドはある日、自分に与えられた力。

「強いつもりだった」

エンフィールドを使つての『実戦』はツングースカの一件が初めてだった。訓練という名目で使い方や殺し方は分かっていた。実際にどこからか連れてこられた男をエンフィールドで殺したこともあった。しかし、実際に戦ってみればこのとおり。桂が規格外なのはわかるが、自身の経験が少なかつたことも原因だろう。そう考えると桂たちについたのは幸運かもしれない。

アイザックと桂という『規格外』の存在の近くにいれば、もっと強くなることができる。そうすれば、『エム』ではなく『マドカ』として存在できる。

「桂…さん」

「くそ…こんなことなら寶貝の一つでも貰つておけば……お？」

『電磁発勁』というこの科学技術バンザイな世界で絶対的なアドバンテージを持つている技を教えてもらつておきながら、寶貝を貰つておけばよかつたと呟く桂。物欲は薄い方ではなかつたのか？

マドカに声をかけられ、振り向くが「さん」付けは怖気が立つので呼び捨てで構わないと告げるとマドカはあることを質問した。

私は『普通』になれるのか？

マド力は生まれた時から暗い場所に居た。誰にも知られること無く、自分に命令を下す者はいたが表の顔も持っているであろう奴らは自分とは違う。オータムもスコールも理由はどうあれ表から裏にきた人間だろう。でも自分は違う。任務で市街地に出ることがあった。その時、親に手を引かれる同年代の子供を見て羨ましく思った。自分にも親が居たのではないか？もし、いたなら自分は何故ここにいるのだろうか？自分は誰にも受け入れてもらうこと無く死ぬのか。

「普通にはなれねえだろう。お前はもう人を殺しているんだからな」

「そう…だな…「た〜だ〜し」「え？」

桂の言葉にうつむいて自分の生まれやこれまでの自分を呪ったが、桂の右手が頭に乘せられ優しい声をかけられた。顔を上げると、そこには桂が優しげな顔で自分を見ていた。

「『幸せ』にはなれるんじゃない？それと…『自分』がわからないなら俺が認めてやるよ。『高槻マド力』として、そして俺の相棒としてな」

「桂……」

桂はマドカに少し寝ておけと告げると部屋を出て行った。残されたマドカは知らずのうちに笑っていた。

「……………桂……………私を認めてくれた？」

「大将」。俺の得物ができたらしいな」

桂は部屋を出て、屋敷の研究室に顔を出していた。桂が頼んでいた刀が完成したと左腕に通信があったのだ。そして、アイザックから渡されたのは日本刀。

「かなり苦勞した。日本の刀鍛冶師の中でも選りすぐりの老人に頼み込んで打ってもらったからな。ISと打ち合っても刃こぼれはし

ないぞ？」

「へえ……ところで、鞘がないようだけど？」

日本刀を持って少し振って調子を見ていた桂がふと鞘がどこにもないのに気づいた。話を聞いてみると、鏢のところにIS技術が使用されているらしく鞘は自動的に生成されるらしい。

「……なるほど。斬殺だけではなく撲殺もできると……棘つけね？」

「むしろ、流体金属で作るのもありだったかもな」

ただ、ビックリドッキリメカ『東博士特製の左腕タケミカツチ』があるため別にいいかと判断した。

「さて、お前とマドカに任務だ。来月開催される『第1回モンド・グロツソ』へ出向く私の護衛だ」

アイザックから渡されたパンフレットにはでかかど千冬の空を舞う姿が載っていた。

「ふーん……優勝候補の日本代表織斑千冬』ねえ……」

千冬の簡単な紹介が載っていた。そこには、『実弾系ライフルを持つ相手には苦戦する傾向がある。そこをどうするかがポイント』と書かれていた。

第6話 二人のはみ出し者（後書き）

マドカちゃんヤンデレに覚醒？

マドカの出自とかは本編入る前に設定集を書くつもりなので、そこまで待っていてください。ちなみに、マドカは楯無（玉櫛）と同じ年の予定。

今回は、千冬メインになると思います。

PS・シャルはヒロインに確定しました。ただ、下手すりゃマドカと同じように病むかも……あれ？ 問題なくね？

12月29日 サイレント・ゼフィルス エンフィールド、その他

修正

第7話 モンド・グロツソにて 前

IS版オリンピックとも言える『モンド・グロツソ』がアメリカで開催された。そしてその会場には来賓客としてIS委員会や各国の重鎮がやってきていた。その中で異彩を放つ存在が一人。

「あれが…イギリスのハイエナか」

IS委員会の理事のほとんどが60代という高齢者の中、たった一人30代のアイザック。若くしてその地位についたアイザックには色々後ろ暗い噂がついてまわっていた。

『目的のためならば手段を選ばず、弱みを見せればそこにつけ込み、弱みがなければ作るハイエナのような男』と諸外国では称されている。実際、そのとおりなのだがそれを『噂』にまで誤魔化しているのだからアイザックの手腕が分かるところである。

「大将、随分、恨まれてんな？」

「フツ。弱みがなければ作る云々は、それだけ怪しいことをしているからだろう。言っておくが、弱みを作ると言ってもありもしないスキャンダルをでっち上げるくらいだぞ？ そこから大騒ぎして実は真実だったと自滅した連中の責任まで取れるかよ」

「カツカツカツ。そりゃそうだわな。つーか、後ろ暗い事してなけりゃ付け入られることもないわ」

「……二人とも黒いなあ」

アイザックの左に立つのは黒いハイネックの上にロングコートを羽織り、右手に鞘に入った日本刀。銘は『壹式斬刀』を担ぎながら笑うサングラスをかけた桂。普通は、このような場にこれ見よがしな武器を持ち込むのはご法度なのだが、ISは待機状態にすればアクセサリーと変わらないため、暗殺には持つてこいの道具なのだ。その警戒のため、IS委員会理事の護衛は牽制のため見えるところに武器を持つものもいた。一応、理由も「IS反動勢力への警戒」などで誤魔化せる。

マドカはメガネをかけて決して派手ではないスーツに身を包み外見はアイザックの秘書とも見える。だが、実際はメガネが待機状態のエンフィールドのため桂と同じくアイザックの護衛である。

「さて…そろそろ試合が始まるな。桂、マドカ。行くぞ」

「うーい」

「はーい」

周りからの畏怖、または尊敬の視線を受けながらアイザックは観戦ルームへと向かう。

「ん？ 尊敬の視線ってなんぞ？」

「しらんのか？ 一応、これでもCIAの長官とさし飲みする仲間んだが？」

「すごいですね……」

「……あ、もしかしてあのメガネのおっさんか？ いやぁ実におもしろいオッサンだった」

「そうそう。あのメガネだ。ちなみに、プライベートでは娘を溺愛しているぞっ。」

「……（ 〓 ； ）」

ハツハツハツと笑いながらアイザックたちは廊下を進む。マドカはそんな二人を遠い目で見ていただけだった。

モンド・グロツソにおいて優勝候補の一角とされる日本代表織斑千冬専用機である『暮桜』を纏い空に浮かんでいた。

『では、日本代表織斑千冬対アメリカ代表ナターシャ・ファイルスの試合を始めます！』

レフェリーの言葉と共に試合が開始された。この試合は、純粋な実力をはかる実戦形式の試合。そして、モンド・グロツソの一番の目

玉でもある。

「行くわよ!」

「チッ」

試合開始と共にナターシャはレーザーライフルを千冬に向けて放った。尤も、それはレフォンパンチに近いものだったので普通に避けられる。

「さて…どうするか」

千冬の暮桜は、左腕にレーザーガンを取り付けているが真骨頂は主武装である雪片による近接戦闘。つまり、近づかなければ有効打はあたえることができない。普通なら難しい。しかし、千冬は独自にあみ出した『瞬間加速』と名付けた機動がある。それを使えば。

「嘘!?!」

「貰ったぞ」

急加速・急停止を繰り返すことにより相手を攪乱しつつ距離を詰めるこの技。この技と自身の剣の腕で千冬はこの地位まで上り詰めた。

「……って、簡単にやられるわけ無いでしょうが！」

「ひっ!?!」

ナターシャが呼び出したのは『実弾ライフル』。それを千冬に向けると彼女は小さく悲鳴を上げ後ろに飛び退き詰めた距離を再び広げてしまう。そして、千冬は先程までとは違い荒く息を吐いて脂汗も掻いている。

「……織斑千冬は実弾ライフルに何かしらのトラウマがある。噂は本当だったのね」

「なに…を」

以前、桂が読んでいた雑誌にも書かれていたとおり千冬は実弾ライフルを持つ相手には総じて辛勝である。そこから各国IS操縦者は調べ始めた。そして、その結果千冬は何かしらのトラウマがあることに気づいた。

「理由は分からないけど……こっちも負けるわけにはいかないの。ゴ

メンね？」

「ナメ……るな」

それは一瞬だった。『瞬間加速』で一気に懐に入った千冬は個々のISが発現する単一仕様能力『零落白夜』を発動させ、ナターシヤを一刀のもとに斬り伏せた。

「トラウマがあるのは事実だ。だが…それで私は止まってはいけないんだ。証明しなければならぬのだ…アイツが…桂が腕を代償に助けた私はこれだけの価値があるのだと」

対象のエネルギーを全て消滅させる『零落白夜』は『電磁発動』とはまた違う意味でISに対して絶対的能力を持つ。それをどう扱うかが千冬が勝利する条件。

そして、千冬は負けるわけにはいかない。『織斑千冬』という存在は桂が腕を犠牲にして守っただけの価値があるのだと証明しなければならぬから。

「先輩！ さすがです！」

「山田君、か。すまない…少し一人にしてくれ」

千冬は一人ロッカールームに籠った。千冬のサポートをしていた山田真耶は目をぱちくりさせながらロッカールームの入り口を見ていた。しかし、すすり泣く声が聞こえてきたため一気に混乱していた。

「ごめんなさい……ごめんなさい」

誰かに謝る声。真耶は一瞬ロッカールームにはいるうかと考えたが、頭を振ると静かにその場を離れた。

「私が…馬鹿だったから」

千冬は自分の体を抱きしめながら桂へと懺悔する。自分が、自分たちが後さき考えずに世界を変えたから。

目を閉じれば『あの時』の事が鮮明に浮かぶ。目の前に飛んできた腕。ナイフを首に突き立てられ壁を染めるほどの血を吹出す男。そして、床にたまった血の海に崩れ落ちる桂。そして、入ってきたのは桂の知り合いと思わしき男たち。桂の容態を知ることすら無く千冬は警察へと連れて行かれた。数時間後には、一夏も連れてこられた。そして、知ったのは自分たちがとても危うい場所にいるということ。

だから、力を求めた。一夏と自分を守るだけの力を。しかし、強くなればなるほど一夏とは離れ、そして『あの時』の事が頭の片隅から離れない。多分、これは罪。自分への罰。桂が現在どうしているのかは知らない。会って謝りたい。でも、それはできない。自分のいる立場が、そしてなにより自分が許さない。だから、ずっとこの罪を背負っていかなければならない。

「……………織斑千冬は……………私と同じ顔？ え？ じゃあ……………私は……………？」

「桂」

「あいよ〜」

千冬の試合を感染していた桂たち。しかし、途中からマドカの様子がおかしくなった。ふらふらと部屋を出て行った。桂がその後を追っていったので大事には至らないだろう。

「（まあ、桂がどれだけ『依存』させるかで今後が決まるな）」

アイザックはマドカの事を評価はしているが、これで桂が『依存』させるまでマドカを手中に収めることが出来れば今後の命令もしやすくなる。

「（だが……色々ありそうだな）」

マドカと千冬の顔が瓜二つなのはアイザックも気づいていた。恐らく、そこには自分が知らない何かがある。

第7話 モンド・グロツソにて 前（後書き）

千冬さんは、実弾ライフル銃にトラウマ持ちです。勝ちはずですが、その後数時間は戦えない。このトラウマは桂が上手く立ち回れば克服しますが……無理でしょう。

次は、マドカになりますね。その後は、少し時間が飛んで一夏誘拐事件のあたりになるかも。

指摘を受けまして、サイレント・ゼフィルスからエンフィールドにIS名称が変わりました。でも、原作に近くなるとサイレント・ゼフィルスになると思います。

ところで、自分が書いているISのSS「これが私のお兄様」「三匹が行く」「とあるはみ出し者の物語」のオリキャラたちを一箇所に集めてみた短編を書いてみたのですが……はつきり言って世界征服できるレベルになりました（＝；）

第8話 モンド・グロツソにて 後

あの女は何だ？ 何故、私と同じ顔をしている？ いや、年齢を考
えれば私『が』あの女に似ているのか？ じゃあ、私は何？ 双子
の妹？ それにしては年が離れている。だが、年が離れていてもそ
っくりな姉妹はいる。でも、姉妹 弟がいるから姉弟か？
なら何故自分だけ『あんな世界』にいた？

「……………」

考えても答えはでない。それどころか考えれば考えるほどに『自分
だけ』が弾かれたように思える。

「ああ……………私が『あんな世界』にいたのはあいつらのせいか……………」

「……………ズゾゾゾ」

自分でも理解出来ないほどに黒い感情に支配されようとしていたマ
ドカを正気に戻したのは、この場に不釣り合いにもほどがある齧を嚙
る音。

「え……桂？」

振り向くとそこにはカップ麺を思い切り啜っている桂が居た。ちなみに、醤油味。

「何事かと思つたら『そんなことか』」

「そんなこと！？ だって、私は「お前は『高槻マドカ』だろ？」「え」

「いゝじゃないの。お前は『高槻マドカ』だろ？」

桂は左腕をバーナーに変形させカップ麺の容器を焼却するとマドカに笑いかけた。

「俺としては、お前と離れたくはないな」

それは桂の本心。マドカを手放したくないため、マドカを引きつけようとする。普通の言動で勘違いされる事が多いが、桂はアイザックと同じく『目的のためならば手段は選ばない結果主義者』である。そして、『更識』内部の空気を察知して独自のコネを作った事や生活のために裏路地を支配していた事からも分かるように冷静に理論的に行動することが多い。故に『マドカという結果』を手に入れる

ために右手を再び差し出す。

「もしお前が千冬たちのところに行きたいというなら……アイザックに頼むさ。さあ……どうする？」

この手を取るなら自分が『高槻マドカ』として受け入れる。しかし、取らないのならば『織斑マドカ』として生きていくようにする。桂の目はそう物語っている。手を取らなければ桂は本当にアイザックに掛けあってくれるのだろう。

だが、考える。自分はすでに何人も殺している。それに、今更出ていったところで自分を受け入れてくれるか？　そこまで人間は優しいものか？

マドカが今まで居た『世界』は悪い意味で人間の本質が分かる場所だった。だから千冬が素直に自分を受け入れてくれるわけがないとマドカは思った。千冬の人となりなど分からない。でも、恋人であるスコール以外を見下していたオータムや、男嫌いなのは知らないが男と見ただけで嫌悪し、なにか頼む場合も見下して『命令』するスコールを見ていると千冬も同類のように思える。マドカが見てきた『女』はそのような連中ばかりだった。

「……………私は……………『高槻マドカ』……………だ」

もちろん、そんな人間ばかりでないのはアイザックの屋敷や実家にいるメイドなどで分かっている。しかし、彼女たちは『IS』とは関係ないため、マドカは『IS』に關係する人間「スコールやオータムのような人間」という考えを持ってしまった。

だから、マドカは桂の手をとった。別に捨てられていてもいい。自分には自分を受け入れてくれる人がいる。それだけで十分だった。

「ま、寂しいとかあったら俺に言え……何とかしてやるよ」

マドカを落ち着かせるように抱き寄せ、背中をさする桂。マドカが見上げた桂の顔は自分を安心させるかのように微かに笑っていた。

「（まあ、戸籍がないことなどを考えると下手すりゃ赤子の頃から『こちら側』だったから精神的に弱いのも分かるが……）」

だが、これはこれで構わない。恐らくこれでマドカの根幹は揺らぐことはないはず。

「（本来なら千冬もフォローすべきなんだろうが……）」

千冬が『あの事件』で左腕をライフル銃で失った自分に対して負い目を感じ、そのせいでトラウマを持っているのは先程の試合や前評

判で大体察することができた。

トラウマを克服させるためには桂が出張ったほうがいいのだろうが、桂にそんな気はない。

「（住んでいる世界が違うからな）」

千冬には知り合いもたくさんいるはず。自分がしなくとも誰かがフォローするだろう。

「そんじゃ、大将のところに戻るぞ」

「うん」

腕を絡めてきたマドカの頭を撫でながらアイザックのもとへと進む桂。千冬へのフォローは自分からする気はない。千冬には悪いが、これも自業自得とってもらうしかない。

マドカは桂の腕に抱きつきながら笑っていた。

「（そうだ。私には血の繋がった姉や弟はいらない。桂がいてくれるから）」

それに本当に血が繋がっているとも限らない。もしかしたら、顔を似せただけの別人かもしれない。冷静に考えればそっちの方が説得力がある。

「（織斑千冬とは幼馴染みと聞いた。でも…『今』桂の横にいるのは私だ）」

桂の横で『パートナー』として隣にいるのは自分。それに、桂から聞いた話では桂の『邪魔』をしたらしい。それだけが原因ではないのだろうが、桂は千冬をあまり心良くは思っていない。

「（桂の邪魔をするなんて…）」

それに、もうあの女が桂の邪魔をすることはないはず。そういえば、以前のあの女の邪魔も許せる。マドカはクスクスと静かに笑ってい

た。

「さて…戻るか」

「ん？ 試合観ていかないのか？」

「総合優勝は日本代表だ。それに…仕事が入った」

「…了解。マドカ、行くぞ」

「うん」

観戦室に着くと丁度アイザックが部屋を出てきた所だった。モンド・グロツソの全日程も終了し、この後表彰式らしいがアイザックは千冬が優勝すると判断し、本国に帰国することに決めた。そして、何より『仕事』が入ったのだ。

「桂、本国に戻り次第マドカと一緒にこの男を移送してもらおう」

アイザックが見せた写真。そこには一人の男が写っていた。

「あれ？ 先月捕まったイタリアマフィアの弟くんじゃん」

写真に写っている男は、先月些細ないざこざで捕まったマフィアのボスの弟。その男をイタリアに連れていくのだが、組織の妨害があると思われるため、複数の替え玉を用意してそれぞれ空路や陸路などを使って組織の妨害を防ぐらしい。そして、桂とマドカには本命の男の護送が回ってきたのだ。

「……なんか、裏かかれそうな気がする」

「というより、フラグにしか聞こえねえ」

「まあ、政府からの命令だからな。分かっているもどうにもできない」

アイザックとしては、ISを2機程度使って弟をコンテナにでも入れて空輸したほうがいいと思うのだが、政府からの許可がおりなかった。

「とりあえず、政府から鉄道を使えと言われている」

「鉄道事故フラグですねわかります」

「桂…縁起でもないよ」

背中に背負っていた刀を右手で担ぐとアイザックの左隣に桂。その隣にマドカといういつものポジションで三人は去っていった。

「兄さん……なんで……」

そして、それを見ていたのは次期『更識楯無』として動いていた玉櫛。彼女は兄の姿を見て安心してた。誰かの部下になっているのは予想していた。しかし。

「なに……あの女」

兄の隣に立って、兄に笑いかけてもらっているあの女は？

「……調べないと」

ここで任務を放棄すれば『更識』を掌握することができない。口惜しいがここは退く。だが、『更識』を掌握することができれば。

「待ってて……兄さん」

兄が戻ってきてくれる。玉櫛はそう決意し、去っていく三人の人影を見据えていた。

第8話 モンド・グロツソにて 後（後書き）

……あれ？　なんか、ヤンデレが増えたような気がする

ちなみに、桂は本気で千冬のフォローを自分からするつもりはないです。アイザックとかから命令されるか、そうしたほうが動きやすいと判断した際にフォローすると思います。

そして、次回はセシリアに関わってくるイベントですね。まあ、原作崩壊になる可能性がありますね。つーか、なるなこれ。

他の小説については、書き進めているのでご安心ください。

第9話 列車にて 前

「やっぱりヨーロッパの鉄道の旅はいいねえ」

「……ねえ。本当に大丈夫なの？ 『ソレ』」

雑誌を読みながらコーヒーを飲んで車窓からの雄大な自然を眺めている桂の向かいに座るマドカがジュースをストローで飲みながら指を指す。そこには、大型のポストンバックがあった。

「一応、空気穴はあけているから問題なし」

ポストンバックの中には、今回の任務である『マフィアのボスの弟の護送』のその弟が入っていた。

「つか、襲撃を恐れるなら鋼鉄製のコンテナにでも入れてIS数機で護衛しつつ軍用ヘリで輸送すればいいだろうに」

「人権とか…後はIS配備とかの問題とかあるから仕方ないよ」

桂はアイザックから命令を受けた当初、そのような案を提出していた。アイザックもそれには同意なのだが、『諸事情』によりそれも不可能になった。ただし、護送手段は特に言われていなかったため、こうして大型のボストンバックに押し込めて『輸送』している。傍目からは旅行者の兄妹くらいにしか見えない上に、桂の左腕はその気になれば戦車すらその左腕で持ち上げられるため、二人の荷物を一つに纏めているという感じにも見える。

「でも…なんか人が多くない？ 同業の人間が多いような…」

マドカは列車の車両内部を見てそう思った。先ほど、飲み物を買いに食堂車へ向かったのだが、そこに向かうまでの車両にも一般客以外に明らかに纏う空気が『同業』の連中がいた。

「何でも、イギリス貴族のオルコット夫妻が後ろの車両に乗っているんだと。ついでに言うならば、前の車両にはイギリスの大臣が乗っているらしい。まあ、列車内の警備は優秀ではあると思うぞ？」

仮にもSPであるからそれなりに腕は立つだろう。そう考え、食堂車で軽食を取るために二人（プラス人間が入っているボストンバック）で向かったのだが。

「おやおや……オルコット女史ではありませんか。それに……情けない旦那さんも一緒にですか」

「……御機嫌よう。確かに、もう少ししっかりして欲しいですわね」

「あはは……いやあ……手厳しい」

件の大臣とオルコット夫妻が会話をしているところだった。オルコット夫妻の不仲というよりは、オルコット家の当主であるアリシア・オルコットが夫であるバーナード・オルコットを嫌っているのは有名であり、そこを大臣が会話の種にしているのだろう。

「……気に入らない」

大臣とアリシアの姿はマドカにとっては忌避すべきものだが、桂は何か腑に落ちない顔をしている。

「ううむ……あの顔はどこかで見たとような」

「え？」

「隣、いいですか？ あいにく、追い出されてしまったもので」

桂の隣に座ってきたのは、バーナード・オルコット。桂が彼が先ほどまで居た席を見ると大臣がアリシアと楽しそうに会話をしている光景があつた。追い出されたのは事実なのだろう。

「大変ですね」

「いえ。僕が情け無いのは事実ですから」

バーナードはオドオドしながらそう言った。

バーナード・オルコットの『情け無さ』はイギリスでもそれなりの地位にいる者は知っている。元々、婿としてオルコット家に入ったバーナードがアリシアの言うことを聞くというのは当然なのだが、ソレにしては『情け無さ過ぎる』というのが大半の意見。ただ、実際に本人と会った人間は「確かに情けない男。なんで、オルコット女史はこんな男と結婚したのだ？」と言っていた。

「そう言えば、貴方は日本の方ですか？」

「ええ。今日は妹と観光に来ていまして。ようやく休暇が取れました」

桂はどこかで見覚えのあるバーナードの顔を思い出そうとしながら、本人との会話を進めている。視線を感じ、バレないようにそのほうを見るとアリシアが自分たちの　　正確にはバーナードの方を見ていた。しかし、彼女も大臣に声をかけられすぐに視線を戻した。

「そうですか。いいお兄さんを持ちましたね」

「は、はい」

「……元M I 5防諜室室長、バーナード・グライス」

引っかかっていた事を思い出した静かに呟いた桂の言葉に、一瞬だけ表情が無くなったバーナードはすぐにさっきまでのなよなよとした笑顔になると、カウンターの前方を見た。

M I 5とはイギリス情報保安局。イギリス国内の治安維持を目的とした情報機関であり、この男はその中の防諜を専門とした『D B ranch』の元室長だった。やめた後は一回民間企業に勤めた後

にオルコット家に婿入りしている。

「昔のことですよ」

「IS委員会アイザック・アルバートイギリス理事直下エージェン
ト高槻桂と高槻マドカだ。敵対の意思はないよ」

桂がカード型の証明書を見せて身分を明かすとバーナードは納得し
たように微かに頷いた。

「アイザック理事の……。ここにいるのはお仕事ですか」

「まあな。それより…なんでアンタが『情けない男』を演じている
のかが分からないな。アンタを知っている人からすれば驚愕モンだ
るっよ」

MI5やMI6の長官の顔は政治家などは知っているが、それぞれ
の部署の室長は知られていないため、バーナードがMI5の防諜室
室長であったという事は一部の人間しか知らないが、それでも普通
はありえない。

「うちの大将が驚いていたはずだよ」

「ははは」

桂が茶化すがバーナードは変わらずのなよなよとした笑みを浮かべるだけ。仮にも情報機関に入っていたのだから『情けない男』というのとは間違いには変わりないのだが、バーナードを見ているとわからなくなってくる。

「もしかして…囿か？ 『この男は情けない。だから、こいつを利用すれば』 と考える連中の」

「いやいや。僕はそんな有能じゃないですよ。無能な情けないダメ男ですから」

「（…正直、同業者として尊敬できるんだが…徹底しすぎだろ。待てよ？ この事をオルコット女史は知っているのか？）」

ふとアリシアの方を見ると、相変わらず大臣がおべっかを使ってアリシアに近づこうとしている。この機会を逃さずパトロンにしようとしているのだろう。イギリスでも有名なオルコットの当主を後ろ盾にしたい気持ちはわかるが。

「（ありや脈なしだな。つか、あの大臣終わったな）」

先程からアリシアはそれとなく会話を終りにしようとしているのだが、大臣は気づいていない。それを見て、桂は大臣の今後の生活は終わったと判断した。他人の顔色を伺うことのできない男が生き抜けるほど政治の世界は甘くはない。

「（しかも、バーナード氏を貶める形でおべっかを使うか普通？）」

仮にどれだけ無能でもその妻に近づくときに貶めるのか。もし、そう考えているならばこの大臣の未来は暗いものだろう。しかし、桂にとつて意外だったのはバーナードを貶められれば貶められるほどにアリシアの目は冷たくなっていく。そして、どんどんその美貌は怒りに染まり、それが限界に達しようとした瞬間に、大臣の服にコーヒーがかかり顔にはトーストがぶち当たった。

「ああ！ すいませんすいません！」

それをしてしまったのはバーナードだった。トーストセットを持ってアリシアに届ける途中でつまずいてしまったのだと誰もが思う。そして、大臣は文句を言おうとしたのだが騒ぎのせいで食堂車の客全員が注目してしまっている。これでは文句を言うことも難しい。大臣は顔をそれなりに売り出していたから。

「桂…あの人」

「なんつーか…バーナード氏が無能を演じている理由が分かった気がした」

呆然としているアリシアにも謝りつつ、後片付けをしているバーナード。アリシアがちらりと見た大臣の顔は怒るに怒れないという感情が全面に出ている実に面白い表情だった。それで溜飲を下げたのかアリシアは息をつくと今度は足元で後片付けをしているバーナードを愛しさや怒りなどが入り交じった表情で見っていた。

「桂…」

「どうやら……オルコット女史はバーナード氏の『演技』を知っているらしいな。まあ、そうじゃなきゃいくらなんでも結婚はしないか。ん？ てことは……不仲ってというのは」

「？」

桂が暫く様子を見ていたのだが、そうつぶやくと再び考え始めた。マドカはアイスを食べながら件の二人を見る。傍から見れば先程までと同じように「貴方はどうしてそうなの？」とバーナードを詰るアリシア。しかし、マドカはあることに気づいた。アリシアの目が悲しみに染まっているのを。

「（変なの…見下しているならあんな悲しくなるはずがないのに）」

「やっぱりそついう事か」

「どついう　　ッ！」

桂の言葉にマドカが聞き返そうとした瞬間、列車が大きな爆音と揺れに襲われた。マドカは思わず外を見ると太陽が見えた。そして、後ろを見ると『食堂車の天井が迫ってきた』。

「え　　」

その直後マドカの意識は暗転した。その寸前に桂の声と銃声が聞こえた気がした。

「チッ…まさかここまで大掛かりに仕掛けるとはな」

第9話 列車にて 前（後書き）

かるーく原作崩壊ですな。どうもセシリアの父親は昼行灯というか、道化を演じているようにしか思えない。だって、いくら無能でもねえ？ ということで、セシリアの父親はこんな感じに。母親については次回書くかも。

ちなみに、桂は善人ではないですよ？

P.S. シャルの父親ですけど…外道設定で行くか、実は良い父親にするか迷っています。出来れば、意見を頂戴したいです。

第10話 列車にて 後

「カ ドカ マドカ」

「ん……かつ、ら？」

目を覚ますと自分は桂の膝に頭を乗せていた。桂はタバコを燻らせながらマドカの顔を覗き込んでいた。

「……は ……！ 何が起こったの!？」

目が覚めて少しぼうつとしていたが、気絶する前の事を思い出して飛び起きると列車は上下反転しており、列車が線路から飛び出し山肌にすべての車両が激突したと桂から説明を受けた。

「原因は…?」

「そのミンチになっている弟くんを救いだそうとした連中とオルコット夫妻を暗殺しようとした連中と大臣を謀殺しようとした連中の三つ巴の結果かな？」

マドカが振り向くと、ボストンバックの中から血まみれの腕が一本ニョキッと出ていた。そして、ふと車内を見渡すと明らかに堅気ではない連中の射殺死体などがあつたり、レーザーか何かで撃たれたと思わしき死体があつた。

「これ…桂がやったの？」

「レーザーで数人殺したが、大半はあそこにいるバーナード氏がテロ屋の銃奪つて反撃していたよ。さすがは元MIE5というべきか…」

マドカがオルコット夫妻や大臣がいたであろう席を見ると、そこにはすでに事切れている大臣。そして、バーナードが盾になったことで守られて九死に一生を得たアリシアがいた。彼女は自分に覆いかぶさっているバーナードを抱きしめて静かに泣いていた。

「お前が気絶している間にテロ屋がやってきてな。戦闘中に持つて行かれたら面倒なんで弟くんを殺しておいて、反撃していたんだが……他の勢力も現れて」

最初は銃撃戦だったらしい。マドカの安全を確保すると、義手をマシンガンに変形させ応戦。相手が銃弾ばかりだったので、義手を通常形態に戻し、ダイナモを使い銃弾を引き寄せて大半のテロリストを倒したらしいのだが、その後にもたやってきたらしくそこからはバーナードも参加しての銃撃戦が再開したらしい。

そして、全てのテロリストを鎮圧したと思っていたら、一人生きておりその男がアリシアを射殺しようと引き金を引いたのだが、バーナードが盾になったことでアリシアには怪我はなく、桂がその男を射殺したのだが。

「結果はあれだ」

着弾位置から推測すると心臓近くを撃たれたらしく、先程から出血が止まらないとのこと。

「SPは？」

「最初の連中が突入してきて真っ先に殺られたよ。いかにもSPでございっつー服装だったからな。それに、列車の脱線で混乱していたというのもあるな」

桂が反応できたのは生来の反射神経と左腕の義手のおかげでもある。

「さて、と。ご無事ですか？ オルコット女史」

「貴方は……」

アリシアの下へ移動した桂は彼女に声をかける。この食堂車で生き残っているのはこの四人。尤も、バーナードは怪しいが。

「IS委員会アイザック・アルバートイギリス理事の秘書の高槻桂です。先ほど連絡をしましたので救援ももうすぐ来ると」

桂が話しかけていると小さくバーナードが呻いた。

「あなた!？」

「ああ……よかった。アリシアは無事だったんだね」

桂は義手をソナーに変形させて心音を探るが微弱。救助が間に合っても危ないと判断した。せめてマドカがISを持っていれば違ったかも知れないが、開発中の第3世代機に改良中のため持つてくることはできなかった。

「アリシア……僕の…書斎の机の中に……オルコット家を狙う奴らの……資料があるから……使って」

「……やっぱり貴方は……」

「あははは……気づかれちゃってたかあ……やっぱり、僕は駄目だね」

「なんで？」

「それが…僕の役割だから、かな？ 君やセシリア、そしてオルコットを守りたかったから…」

「（根っからの仕事人か。大将が苦手な人間だなこりゃ…）」

桂からみてもアイザックは優秀すぎる。しかし、以前バーで飲んでいたときにアイザックが口にしたのだ。

『一番恐ろしいのは、お前のように殺人などに躊躇しない人間でも、どこぞの宗教の狂信者でもない。周りからなんと言われようとも自分のすべきことを把握して、それを徹底する人間だ』

バーナードのような人間は味方にすれば頼もしく、敵にすれば恐ろしい。実際のところ、アイザックも数回そのような人間のせいではない利益を出したことがある。

「でも、そのせいで君には…迷惑をかけてしまったね」

「……馬鹿にしないでくださる？ これでも人を見る目はあるつもりだから」

桂はマドカの下へと戻っていった。マドカも怪我をしている可能性があるためだ。それに、ようやく本音で語り合っている夫婦の邪魔はしたくない。

「ただ、それが死に際つてのもなあ」

桂はよく知らないが、あのアリシアの様子だと薄々感じていた。というよりも、バーナードへの詰りなどは、今の様子からすれば大體想像が付く。

「どうして貴方はそうなの!？」は「どうして貴方は無能を演じているの!？」に。「貴方と居ると自分が情けなくなってくる」なども「愛する男にそうさせざるを得ない自分の無力さに」…「といったところだろうか？」

「そもそもよくよく考えれば恋愛結婚とか聞いたからな…」

よく大恋愛をしたカップルが結婚した後に些細なことで言い争うの

はよく聞く。体裁のためにも離婚はしないだろうが、それでも冷え切った仲になるだろう。一度、イギリス王室からアイザック経由で貴族の素行調査を命令されたので、調査を単独で行ったのだが、その時にオルコット夫妻だけ『そのような噂』が見当たらなかった。オルコット家のメイドを誑し込んで調べてみても白。せいぜいが、バーナードを貶めるような発言をしたメイドがアリシア直々詰られて追い出されたくらい。

つまりは、そういう事なのだろう。流行りのツンデレと言えば簡単なかもしれないが、実際は『貴族』や『名家』としての体裁や義務などのせいで素直になれない女性とその女性を支えるために無能を演じていた男のすれ違いなのだろう。

「桂……」

「覚えとけよマドカ。あれもまた愛の形だよ」

オルコット夫妻には悪いが、マドカの精神的成長を促すことができただけで今回の任務もまあ悪いものではない。護送対象についてはこの事故で死んだということにしておけばいい。とりあえず、誤魔化すためにポストンバックから死体を放り出しておく。マドカはオルコット夫妻をずっと見ていた。

あの鉄道事故から一週間が経った。結局、バーナードは助かること無くアリシアの腕の中で息を引き取った。桂はアイザックの下に戻った後すぐに今回の事件の捜査を開始した。そして、情報を集めてそれを持ち帰ってここにいる。

「結果として、生存者は乗員乗客含め10数人。死亡者の中に現職の大臣。生存者の中にアリシア・オルコット氏などが含まれていたため、蜂の巣をつついたようにイギリスの警察が動いている。そして、お前の持ち帰った情報もあり政治家やイタリアマフィアも巻き込んだ大捕物になっているな」

「ふん。んで？ 今回の任務は失敗か？」

失敗となるとその任務分の金が入らないため、そこをはっきりさせておきたい。勿論、アイザックの部下なので給料は毎月支払われるのだが、任務になるとそこが臨時ボーナスとなる。

「そうだな…まあ、これは警察の見通しの甘さもあるな。妨害があ

ると考えていながら鉄道を使ったという甘さが」

「まあ、俺は妨害ありきで動いていたからそうでもなかったが…まさか鉄道事故を装うとは」

「…ゴメンなさい」

マドカも妨害はあると思っていたのだが、油断していた。だがこれは仕方がない。というより、桂が動けたのがおかしいくらいだ。

「とりあえず、護送任務事態は失敗だが…アリシア・オルコットを救出できたということやこの情報で半額支払いになる」

「あつそ。そついや、オルコット女史はどうなったん？」

あれから一週間。他の生還者の話は捜査している中で聞いていたが、アリシアのことは全く分からなかった。

「話では食事も取らず、娘すら部屋に入れずに一日籠っていたらしいが、翌日になるとダークスーツに身を包んで出てきたそうだ。自分の操はバーナード氏に捧げると」

「へえ」

他にも、娘に自身の父親がどんな事をしていたのかなどを教えたりしたらしい。さらには葬儀でバーナードがどれだけすごいのか、そして自分がどれだけ助けられていたのかを喋ったとも聞いた。アイザックは吹っ切れたと判断しているのだが、あながち間違いでもない。

「そして、どこから情報が漏れたのかはわからんが、バーナード氏が元M I 5の防諜室室長だという事がバレてな。さらに言えば…バーナード氏が集めていたオルコットと敵対していた企業の弱みやらなんやらも発見されていてな」

その結果、バーナードの評価は逆転したらしい。なにせその情報のせいでひとつの企業が潰れたらしい。腹に一物ある連中やバーナードを必要以上に貶していた連中はガクガクブルブルと震えているだろうとはアイザックの談。

「さすがというべきか……お前が誑し込んだメイドのことも調べられていた」

「うわ〜…っーことは俺のことか？」

たらしこんだという部分でマドカの目が冷たくなったが、桂は気に

していない。誑し込んだメイドとは肉体関係を持っているが互いに割り切っているため面倒な事にはなっていない。

「いや。ただ単に素行調査だろう。ただし、お前の事は不審に思っていたらしい」

MEI5時代からバーナードに付き従っていた男が調べたものらしい。その男もプロフェッショナルということだろう。

「なるほどね」

あの食堂車で自分に近寄ってきた理由と身分を証して納得したように頷いた理由がわかった。

「とりあえず、この件に関してはこのような感じだ。ということでお前らは暫く休暇になる。旅行に行くなら土産は忘れないようにな」

「あいよ。行くぞマドカ」

「うん」

桂とマドカが出て行った扉を暫く見つめていた後、アイザックは一

つの手紙を取り出した。差出人はアリシア・オルコット。そこには、今回の事件にまつわる一連の騒動を静めるサポートをしたことに対する感謝と、娘がISの世界に行くため出来れば厳しく目をかけてもらいたいという手紙だった。そして、最後にはバーナードの友人だったアイザックに対する礼だった。

「まあ…友人だからな」

アイザックはMI6だったが、親交はあった。尤も、バーナードがMI5を辞してからは会うことも少なくなったが、それでも友人としてたまに酒を飲んでいた。

「夫婦、か……」

アイザックはそう言って天井を見上げた。思い出すのは、柔らかな金の髪と太陽のような笑顔。

「マリー……」

今頃あの少女は何をしているのだろうか。そう思うと『あの男』に殺意が湧いてくる。婚約者がいるのに彼女と付き合い、そしてそのまま関係をズルズルと続けて中途半端に実利を求めて彼女を『愛人』として囲い、尚且つ本妻から守りきれないミシエル・デュノアという男に。

第10話 列車にて 後（後書き）

ということで、列車事故はこれにて終わりです。原作に行くまでに閑話としてアリシア視点の話を書くと思います。

次回は、一夏誘拐事件かな？ その後、シャル編を書いて閑話 原作入りになると思います。

P.S. シャルの父親に関しては、アイザックや桂程のド外道ではないけどそれなりにひどい人という感じで行きます。実はいい人は、結構他の作者様が書かれているので…。

様々な意見ありがとうございました。

第11話 モンド・グロッシンにて

「アイザック。桂は？」

「奴なら墓参りだ」

アイザックたちは現在ドイツにいた。今日、第2回モンド・グロッシンがここドイツで開催されるためだ。そして、マドカは桂からアイザックの護衛に回るように言われている。そして、桂はバイクに乗って山の方へと向かっていった。何故が分からなかったが、アイザックの答えで納得した。

「墓参りって…あの飛行機事故？」

「そうだ」

あれからもう数年が経つ。桂は今まで墓参りには行っていなかったのだが、身边が落ち着いたことで両親の墓参りに向かったらしい。ただ、向かう前にアイザックには「最初で最後の墓参り」と言っていた。

「骨はないのに墓参りもないとは思うが…勘弁してくれ。本来なら酒をばらまくんだろすが二人とも飲めないから富士山麓の雪解け水を持ってきた。結構、うまいぞ」

そう言つて桂は担いでいた壱式斬刀を降ろし、バックの中から水の入ったペットボトルとコップを三つ取り出し、それぞれに水を注ぐと二つのコップを地面に置きその場に座つた。

「あれから色々あつたよ…千冬の護衛で左腕は失つたが、束が義手を送つてきてな？ 結構…というかかなり使い勝手がいい。実際、この義手は今も強化されているんだよ」

束から送られてくる追加メモリだけでなくアイザックが抱える技術班のおかげで、どんどん強化されており、プラズマ光弾を発射できるようにもなつた。

「あとは…千冬がなんかトラウマを持っていたな。でもまあ…それ

をどうにかするつもりはない。言っちゃ悪いが…自業自得だしな」

千冬の事や、マドカの事、アイザックの事など色々なことを話したいの話を話し終えると、壱式斬刀を担ぎ立ち上がった。

「最初で最後の墓参り…結構楽しかったよ。といっても、一方的に喋っただけだけだな。まあ、もう少しだけ生きてそっちに行くよ。会えるかどうかは分からないけどな」

桂は最後に花を置いてその場を立ち去った。これでもう本当に最後に墓参りも両親を弔うのも最後。

「そんじゃ…夫婦仲良くな」

桂は壱式斬刀で肩を叩きながらその場を後にしたのだが、その瞬間風が吹いた。桂は暫く呆然と立っていたが、小さく笑うと今度こそ立ち止まらずに歩き出した。風が吹いた瞬間両親の声が聞こえた気がした。

「どろしてどうなるかねえ」

桂は現在、ドイツ市街を爆走していた。そりやもう法定速度なんて気にせずに。原因は目の前の車にのっけている少年にある。

『桂。織斑一夏が誘拐された。すぐに救助に迎え』

そのような命令が来た。というよりも、丁度誘拐されるところを目撃して、アイザックに報告したのが運の尽きだった。結果として、モンド・グロツソに出場している織斑千冬の二連覇を妨害しようとしている勢力の仕業ではないかと判断され、現在アイザックが独自に動いている。これで日本に恩を売るつもりだろう。尤も、先程の通信で千冬たちも気づいたようだが。

「反応は…郊外の廃工場か」

発信機を打ち込んでいたため居場所はすぐに分かる。ちなみに、例の「ごく義手の機能である。

「しかし…どこの馬鹿が仕組んだ？ バレたら世界中から批判が来るぞ」

モンド・グロツソで織斑千冬の二連覇を妨害した。これほどの不祥事はない。これがまともに戦った上でならば問題は何も無い。しかし、競技外の部分でやってしまったては不祥事以外の何者でもない。下手をすれば、IS委員会から制裁が下る。

「可能性としては…イギリスとアメリカ、ロシアに中国以外のどこかか？」

イギリスはよくも悪くも『騎士道』を尊ぶ。それゆえに、追い詰められた状況以外ではこのようなことはしない。というより、アイザックを敵に回す馬鹿が居るはずがない。国力で世界一のアメリカも同様。ロシアと中国は微妙だが、そのようなことをしなくても射撃部門や近接戦闘部門で好成績を残しているためそこまでする必要はない。中国に至っては千冬と僅差で負けているため、イメージもいい。

「まあ、そこを考えるのはうちの大将ってことで仕事をしますか」

件の廃工場に着くと、バイクを粒子化して義手内部に転送する。実に便利な腕である。右手に壱式斬刀、左腕はソナーアームにすると壁に近づき工場内部を調べる。ついでに、人差し指をカメラにして内部を覗く。映像はしっかりとゴーグルに転送される。

「ざっと見て5人か…そして展開状態のISが一機。あれはアラクネ…ってことはあのアバズレか」

カメラに映っているのは五人の男女とアラクネを展開しているあの女。そして、そこから少し離れた柱に縛られているのは織斑一夏。一応、場所は先ほど転送しておいたのでアイザックが千冬辺りに情報を送ることだろう。

「とりあえず…その前に救出しておいたほうがいいか。とりあえず、誘拐犯は一人生きていればいいだろう。どうせ、顔も録画したし」

左腕をグレネードランチャーに変形させ、弾頭を催涙弾に変更すると壱式斬刀の鞘を粒子化し突入準備を整えた。桂の顔はすごく笑顔である。一々、鞘を抜かなくてもいいことや抜いた鞘を回収する手間もないためすごく楽なのだ。

「そんじゃま…開幕ブツパしますかね！」

ガラスを破って工場内部に撃たれた催涙弾はすぐさまその効力を發揮して工場内部を白い煙で包んだ。

「一夏が誘拐された!？」

それは試合前に訪ねたアイザックが控え室に入って一番初めに聞いた叫びだった。その情報を持ってきたのはどうやらドイツ軍。そして、誘拐された一夏が居るであろう場所を教えるというところにアイザックが入ってきたようだ。

「織斑一夏ならすでに私の部下が救出に向かっているぞ? まあ、部下が偶然その現場に居合わせたらしいが…ちなみにそちらの場所はどこかな?」

「ん? ああ…ここだが?」

そう言って開示した場所というのは桂から送られてきた場所と一致する。とにかく千冬はすぐさま救出のために飛び出した。残ったのは、アイザックとドイツ軍の人間。そしてそれぞれの秘書。

「…………随分とすぐに分かったものだな?」

「一応はドイツ国内なのでね。それに、そちらもタイミングがいいことだ」

「……ふふふふ」

犯人は分からないが、どちらも弱みを見せないように腹の探り合いを行っている。それをやっている本人同士はいいかもしれないが、マドカたち秘書はそうもいかない。実に精神衛生に悪い。

「（桂：早く帰ってきて）」

ただそう切に願う。

「いよう。少年、無事かい？」

「あ、あんたは!?!」

催涙ガスが充満した場所から従業員のロッカールームらしき場所まで連れてこられた一夏が見たのは黒い外套に身を包んだ右手に刀、左手は銀色の義手の男だった。

「俺は高槻桂…まあ、俺のことはどうでもいいさ。とりあえず…助けに来たよ?」

「なんで疑問形…」

「だってねえ…おっと。まあ、少年あれだ。これを持っておけ。チタン合金製の盾だ、ライフル弾くらいなら止められる」

義手から転送した盾を一夏に渡すとロッカールームを出て行った。その前に決してここから出るなど言い聞かせておいた。自分の事を知りたがっていたが、まあ別に知ってもらおう必要もない。

「これって…臨時ボーナスでるのかしら」

「何を言って「やかましい」「」

アイザックから臨時ボーナスが出ることを期待しながら誘拐犯の男を出会い頭に電磁発動で気絶させ、ワイヤーによる亀甲縛りで縛り上げその場に転がして先程まで一夏が縛られていた場所へと戻ってきた。そこには、先ほど縛り上げた男以外の面子がいた。

「よーす。IS委員会直下エージェントの桂お兄さんだよ」

「な…馬鹿「はいシヤラ〜ップ」」

女が一人叫ぼうとしたが、その瞬間桂の義手から撃ち出された弾丸で額に風穴を開けられ後ろにどろりと倒れた。

「とりあえず、生き残りは一人でいいだろ。ついでに、そのアバズレはさっさと帰れ」

善は急げと速攻で残りの人間をサクッと殺した桂はそう言ってオータムに声を掛けるのだが、オータムは言い返してきた。

「ハッ！ 誰かと思えばヅラ野郎か！ アタシにはオータムって名前があるんだよ」

「…じゃあ秋ちゃんって呼ぶわ」

「やめろお！」

ヅラ野郎と言われたことにイラつきながらも、オータムのコードネームを知ることができたためそこでおちよくる桂。オータムが呐喊を仕掛けてくるが、桂はそれを右足で止めた。オータムの顔が驚愕に染まる。初速の段階とはいえ、突進してくる鉄の塊を片足で止められるはずがない。

「はあ！？ テメエ…改造人間か！？」

「ちょっとした発勁の応用だ。まあ…それはそれとして…ほれ」

「ッ！？ 液体…はあ！？」

義手からばらまかれたのはなにやら毒々しい色をした液体。すぐに回避できたが、アラクネの脚にその液体がかかったと思えば、かかった部分がしゅうしゅうと音をあげて腐食し始めたのだ。

「おお、『腐食液』の調子は良好だな。王水やら超酸やらを混ぜ込んでマズイかな？と思ったけど」

「腐食……液？　おい待て。今なにかヤベエ事言わなかったか？」

敵なのだが、聞き逃せない単語を耳にしたオータムは恐る恐る聞いてみた。自分の予想が外れていることを願いながら。

「あ？　王水やら超酸などの酸をかたつぱしから合成して作った『理論上地球上の物質ならば溶かすことのできる』特製の液体ですがなにか？」

「お前……それを対人戦で使うか？」

どちらかと言えば犯罪者であるオータムが言うのもおかしいことだが、『普通』そのようなものを使うなど考えない。

「一つ教えておこう。普通のエージェントは今のお前みたいに銃火器や刀剣類や爆発物を使うが『普通じゃない』エージェントは何だつて出来るんだよ」

桂の顔はオータムですら泣きたくなくなるほどの凶悪ですごく嬉しそうに笑顔だった。

「お前……それ……合法組織のエージェントがいうセリフじゃねえぞ

！」

「ハッ！ 知るかポケエ！ 今日日表向き合法組織が非合法活動しているのは常識だろうが！」

壱式斬刀をアラクネに振り下ろすが、それは脚で防御される。しかし、桂は不敵な笑みを崩さない。オータムが何事かと思った瞬間、先程の『腐食液』の事を思い出し一気に距離をとった。その予想通り義手の指先から腐食液が飛び出し、誘拐犯の死体にかかりかかった部分がどんどん溶けていく。あまり見たい光景ではない。だが、桂はその様子を見つめながら『腐食液』の効果を確認する。冷静に効果を確認する桂にオータムは少しの恐怖を感じた。

「……ふむ。人体にも有効、と」

「テムエ……マジで『普通』じゃねえよ」

当初は目的のためなら手段を選ばないだけかと思っていた。だが、選ばなさすぎる。目の前の男は自分たち以上に『外れて』いる。

「自覚しているさ。それより……いいのか？ ISがこっちに近づいてきているが？」

義手から送られてくる信号。それは、IS一機がこちらに近づいてきているということ。恐らくは千冬のIS『暮桜』。

「……チツ。つーか、室内でテメエには勝てないのは認めてやるよ」

「そろどうも」

ISの弱点としては、その大きさから室内での戦闘が難しいということがあげられる。尤も、それも使い手次第なのは変わらないが。

「チツ…テメエを殺すには遠距離しかないようだな」

「やれるもんならやってみな」

「覚えてろ!」

オータムは桂の余裕の発言に憤怒の表情を隠せないが、ここにももジリ貧だということは理解している。分かっているからこそ捨て台詞を残して撤退するしかない。

「さてと…マドカに迎えを頼むか」

ロッカールームから一夏を連れてきて、ついでに縛り上げていた男を回収したのだが落ちていたガラスの破片で頸動脈を切って自殺していた。真相を知られないようにするためだろうが、桂は面倒事が増えたことに泣きたくなつた。

「あ…あの…」

「どうした少年？ 死体はあまり観るものじゃないぞ？ そのような嗜好なら仕方ないが」

死体の顔写真や血液などを採取している桂はこちらを見ているであろう一夏に向かってそう声をかける。

「なんで……」

一夏はなんで殺したのかと聞いているのだろう。誘拐されたというのに心優しいことである。

「……フッ」

だが、桂は何も言わない。桂は自分が『異常』であることを自覚している。それは、あの飛行機事故の際に生きていたテロリストを殺

した時から。そして、それをアイザックの下に置くことで抑制していることも。

「さあて…そろそろ君のお姉ちゃんが迎えに来るんじゃないかな？」

「え？」

サングラスを掛けると同時にISが天井をぶち破って突入してきた。瓦礫で死体が潰されたが証拠は抑えておいたので問題はないだろう。

「一夏！ 無事か！」

「千冬姉！ 俺は大丈夫…あの人が助けてくれたから」

一夏の姿を確認した千冬が怪我などがないかを確認していると、千冬がこちらを見た。最初は誰かわからない様子だったが、徐々に思い出してきたのが分かる。

「桂…」

「フフン。んじゃま……縁があったらまた会おう」

その言葉と同時に千冬が開けた穴から連絡を受けたマドカがアイザックより与えられたサイレント・ゼフィルスに乗って降りてきた。

「迎えに来たよ」

「」苦勞さん。そんじゃ、帰るぞ」

サイレント・ゼフィルスの背中に取り付けてある専用のラックに右手と右足を乗せてその場を離脱する二人。千冬が何かを叫んでいるようだが、桂は気にせずアイザックの下へと帰還した。

結果として、今回の事件による織斑千冬の決勝戦棄権については、公には諸事情による棄権とし、誘拐事件は各国上層部のみが知ることになった。そして、誘拐犯に関しては桂が持ち帰った血液や頭髮、

写真などを分析した結果ドイツやアメリカなど別々の国の人間が関与していたことしか分からず、個人の特定などには至らなかった。結果、IS委員会はこの事件の首謀者を正体不明の組織が行ったこととしたが、アイザックは『アラクネ』がいた事などを鑑みてマドカに確認をとったところ亡国機業の犯行であると判断し、委員会に報告。そして、委員会は『亡国機業』を国際テロ組織として秘密裏に調査を続けることを決定した。

「まあ、事の顛末についてはこんな感じだ。ということ、お前らは暫く休暇になる。旅行にいくなら土産は忘れないようにな」

「あいよ。行くぞマドカ」

「うん」

マドカを連れて去っていた桂を見送ったアイザックはパソコンを操作して、ある項目を見つけた。

「ISシェア世界三位のデュノア社がとうとうイグニッション・プランから除名されたか」

現在、世界各国がIS第三世代機への移行を急ピッチで行っている状況。イギリスも『BT兵器』と名付けられた無線式移動砲台兵器を搭載した第三世代機が完成しており、マドカが使用していた『エ

ンフィールド』がその試作二号機『サイレント・ゼフィルス』に改修され、実際にマドカの手によって運用されている。

そして、第二世代ISの中期型から行われてきた欧州統合防衛計画「イグニッション・プラン」からフランスが弾きだされた。それが、このニュースだった。

原因としては、フランスの第二世代IS傑作機『ラファール・リヴアイヴ』にある。フランスはこの傑作機を造り、開発したデュノア社がISシェア世界三位の有力企業になったはいいのだが、デュノア社が急成長したせいでフランス国内のその他のIS企業が衰退してしまった。さらには、第三世代機の開発も難航しており、他国のように完成どころかその目処すらは立っていない状況。

それらの理由や、フランスにプランから外れてもらったほうが都合いい他国の事情もあり今回イグニッション・プランから除名される事態になった。

欧州の情勢が変わりそうな事態に頭が痛くなりそうだが、結局は他国なのでどうこうするつもりはない。

「互いに善人とはいいがたいよなあ…ミシエル」

アイザックが机の引き出しから取り出した写真には三人の学生が写

っていた。一人はアイザック。後の二人は、現デュノア社社長ミシエル・デュノアともう一人。写真から見ても分かる柔らかい金の長髪をもつ一人の少女。写真の少女はマリエル。アイザックが学生時代片思いをしていた少女。現在、病床におり尚且つミシエルの愛人として本妻より冷遇されている女性である。

「母さん…気分はどう?」

「大丈夫よ。でも…ゴメンね。私が　ゴホッゴホッ」

フランスパリ郊外のある邸宅には一組の親子がいた。マリエル・ロームイヤとシャルロット・デュノア。父親によって月に数回しか会うことができない親子。

「母さん…母さん」

シャルロットはそう言つとマリエルに抱きつき静かに泣きはじめた。マリエルはただ静かに娘の小さな背中を愛おしそつに撫でる。

「（……ミシエル…貴方は…この娘まで弄ぶの？）」

ミシエルに愛がないといえば嘘になる。そうでなければこの娘を産むことなど無かつた。しかし、現状は娘は『自分の娘』としては認められていない。それが、まだ子供と言えるこの子にどれだけの負担になつてゐるか。そして、正妻からどんな仕打ちを受けてゐるか。分からないほどマリエルは箱入りではない。自分は構わない。ミシエルが正妻と結婚してからも関係をズルズルと続けていたのは自分がまだミシエルに愛を持ってゐたから。しかし、会つたびに顔から生気を無くしていく娘を見ていればその愛も冷める。

152

「（何も知らなくてただ馬鹿騒ぎをするだけだつた学生時代が懐かしいわね）」

あの頃は将来も真剣に考えていなかった。だが、それは自分だけだつただろう。学友は、特にミシエルとアイザックはすでに将来を見据えていたはず。

「アイザック…貴方は今どうしているのかしらね」

第11話 モンド・グロッシンにて（後書き）

桂はこんな男です。主人公向きではないキャラですね。ただ、空気は読めますよ？

そして、次回からシャル編になる。なんか、予想以上にシャル父が外道になりつつある。ううむ。

第12話 フランスにて

『ふん…売女の子どもが偉そうに…』

『…ゴメンなさい』

映像の中で性格のきつさが顔にも出ているような女性が、質素な服を着ている少女を憎しみの籠った目で睨みつけている。それが二人とも容姿が整っているだけに余計にきつい。

「……子供への嫉にしちゃあ……憎しみが籠っているわな」

「こつちも調べがついたよ。あれはシャルロット・デュノア。ミシエル・デュノアとシュザンヌ・デュノアの間に生まれた娘らしいよ？」

「だが、実際は…マリエル・ローマイヤとミシエル・デュノアの間に生まれた少女、か」

桂とマドカは現在、フランスのホテルに居た。理由は、アイザックからの命令。ミシエル・デュノアの周辺調査。理由は、イグニツシ

ヨン・プランから除名された動向調査と言われたが実際は違っただろう。本音を聞こうとしてもアイザックの威圧で聞けなかった。怖いというより聞いても無駄と判断したのだ。

「しかし…メイドを誑し込んで分かったのは、認知されておらずデユノア社にいるのも母親の治療を盾に、という感じだ」

桂が色仕掛けで情報を集めることについてはもう何も言わなくなつた。というのも、『一番』は自分であると気づいたからである。

それはさておき、調べた結果結構ドロドロしているのが分かった。詳しいことは書類にまとめ、自分たちが知っておくべきことを整理する。

「まず、ミシエル・デユノアはマリエル・ローマイヤに対して愛情は持っていないと判断する。逆はわからんがな。そして、マリエル・ローマイヤを郊外に押し込めているのは醜聞を恐れていることだろうな」

権力者の常識で考えるならば愛人など持っていてもおかしくはないが、一般人の常識で考えるなら批判的である。さらに言えば、女尊男卑の風潮もある。下手をすれば身ぐるみを剥がされる。

「多分そう。そして、マリエル・ローマイヤの方は満足な治療を受

けていない。それは、正妻の妨害だと思う。そして、娘は母親の為にデュノア社にてISを駆っている」

「なんか…親近感が湧くな」

「うん」

マリエルとシャルロットの境遇は自分たちと似ている。特に、シャルロットの方は本妻から『シャルロット』という存在を認められていないのだからより一層だろう。マドカナぞシャルロットに感情移入している節がある。

「でも、アイザックがなんでこんな命令を…」

「ああ。そりゃあれだ。マリエル・ローマイヤに学生時代から思いを寄せていたらしい。それで、ミシエル・デュノアと付き合うことになったときは「彼女が幸せなら」っつーことで身を引いたらしいが」

実際は、結婚するわけでもなく『愛人』として困っておいて本妻から守り切ることできない状況に我慢ならず今回のフランスがイグニッション・プランから除名された混乱に乗じてというところ。

「なんか珍しいよね。アイザックがこんなに私情込みで動くなんて」

「大将は欲しい物は奪うからな。ある意味フランス・ドレイクだな」

かつて16世紀の大英帝国において、当時のエリザベス女王より他国に対する「私掠船」^{プライベートア}として海賊行為を認められた海賊の一人をアイザックに重ねているのだが、ハマリすぎている。さすがは、「イギリスのハイエナ」というところか？

「つーか、ミシエル・デュノアもなんつーか……微妙なんだよな。俺やアイザックのようにド外道でもないし、かと言って実利主義にしてはツメが甘いし」

「桂たちと比べるのは間違っていると思う」

アイザックならば、それこそ自身の持てる権力を全て動員するだろう。だが、ミシエルは調べた限りでは、愛人との子を本妻との子として戸籍を作っている。別にそれはおかしくはないが、愛人であるマリエルが存命しているのに、というのが引つかかる。

「いくらシャルロットに高いIS適性があったからって…いや、待てよ。もしかしてシュザンヌ・デュノアは…」

仮定の話ではあるが、シュザンヌに子を成す事ができなければこのような面倒な状況なのも理解できる。

「可能性はある。だから、シャルロットが余計に憎いということもあり得るし、それを産んだマリエル・ローマイヤにも」

「……女つてのは怖いな」

『桂、マドカ。私だ。今すぐテレビを見る』

「あ？」

突然、通信を繋げてきたアイザック。彼には珍しく焦っていたような気がする。マドカがホテルに備え付けてあるテレビを付けると二ユースキヤスターがある速報を伝えていた。

「日本でISを使える男子を発見ねえ……は？」

別に普通のことだろうと思っていたが、よくよく考えるとおかしいことに気づいた。『男』がISを使える？ 職業柄聞き間違いは致命的だというのにも思いマドカの方を見るとマドカもこっちを見ていた。どうやら聞き間違いではないらしい。

『すまんが、桂。お前は明日にはこちらに戻ってきてくれ。明後日からジユネーブの委員会本部で会議が行われる』

「私は？」

『マドカはそのまま調査を続けておいてくれ。恐らく、このことで色々動くと思われる』

「とりあえずは…シャルロットのほづに張り付いておいたほづがいいな。マリエル女史の方は…あ、そうだ。アイツにしよう」

「アイツ？」

『残念だがジヨシユアはオルコット家に行っているぞ』

「え？」

桂が自分の代役として呼ぼうと思っていたのは、同じアイザックの部下で銃火器 特に狙撃に関しては桂以上の実力者であるジヨシユアという男。だが、その男は現在オルコット家に執事として出向していた。

「なんでよ？」

『セシリア・オルコットがIS『ブルーティアーズ』の操縦者に決まったことは知っているだろう？ あの機体はマドカの『サイレント・ゼフィルス』とは違い、近接武器はショートブレードしかないからな』

サイレント・ゼフィルスには、ナイフや銃剣として使用できる『スターブレイカー』が搭載されているし、そもそも桂との連携戦闘がメインであるためそのように調整されているが、ブルーティアーズはそうではない。

「だから元SBSのジョシユアを教育係にしたのか？」

元イギリス海兵隊特殊船艇部隊でその前は第40コマンドー旅団にて小隊員としてアフリカの紛争に参加していたというジョシユアなら教育係としては最適だろう。

『そうだ。アフリカの紛争でリアルランボーを成し遂げたあの男ならやってくれる』

「……あれ？ あのうって桂と同年だったような」

「実にいい奴で、一緒にいるのも楽しいが俺はあの筋肉ダルマを同じ24歳とは認めん」

身長は2メートルを超え、筋肉でガツチリしすぎている男が自分や千冬たちと同じ24歳とは認めたくはない。それでいて、性格は温厚なので仲間内からはクマとか言われているが、ぶっちゃけ一回スイッチが入るとクマはクマでもグリズリーになる。

『まあ、そういう訳だ。マドカなら単独行動もできるだろう』

「…うん」

「大丈夫だ。お前ならできる　　と、その前に外で飯でも食うか」

桂はマドカと共に外に出て食事を取ることに決めた。しかし、そこで二人は出会うことになる。一人の壊れた少女と。

「社長…どうしましょうか？」

フランスのデュノア社の社長室では、『ISを世界で唯一扱える男』の対策で蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。尤も、それは世界各国共通の事態なのだ。

「とりあえずは事態を見守るしかあるまい」

去っていく部下を見ながらデュノア社社長であるミシエルは事態を静観することに決めた。無論、これは一時的な措置。付け入る隙を見つければ。

「…そういえばイギリスの理事はアイザックだったな」

かつての学友。そして、学生時代から何かと争ってきた好敵手。それが、ミシエルにとってのアイザック。そして、それはアイザックも同様。

「しかし…これは行幸というべきか？ 奴がイギリス理事ならば色々動きやすい」

確かアイザックは学生時代から自身の愛人であるマリエルにご執心だったはず。ならばマリエルを『手土産』にすれば。

「アイザック…悪いが、フランスのために動いてもらおう」

ミシエルは不敵な笑みを浮かべると端末を操作して、自身の娘を呼び出した。

「なんででしょうか？」

数分も経たずにやってきた娘は全てを諦めているような雰囲気だった。それはドレスを着せて椅子に座らせれば薄幸の美少女として一枚の絵になりそうなくらいに。

「さて…シャルロットは『不慮の事故で死んだ』。明日からは貴様には『シャルル・デュノア』として生きてもらう。今日まで『シャルロット・デュノア』として生きることが許可する」

その瞬間、シャルロットから表情が無くなった。ミシエルはそれを見て小さく息を吐いた。

「(まったく…面倒な事だ。これだから女は御し難い)」

今の世の中で知られれば一気にバッシングに発展しそうなセリフを飲み込みながらミシエルは続ける。

「貴様の意思など関係ない。先のイグニッション・プランからの除名でフランスは追い詰められていてな。どうするか考えていたところだ。我が社が発展しすぎたせいで国内の他企業が衰退したのは事実。それらの企業の回復なども視野に入れなければならない」

デユノア社が発展するのは当然のことだが、ミシエルは「競争無くしては成長は無し」という持論を持っている。そのために国内企業を成長させるためにも、イグニッション・プランは必要だった。他国の技術などが手に入れやすい計画から除名されたのは自身の不徳と考えていたミシエルはどうかしてイグニッション・プランへの再参加を考えていた。そこに『織斑一夏』という存在があった。

その存在を利用するために、策を弄した。そして、今日からシャルロットは死にシャルルとなる。

「分かったらさっさと行け。部屋には着替えを用意させている。一人称は…元々『僕』だったから構わんが…今後は一つ一つの所作にも気をつける。それと、どこから情報が漏れるかわからんからマリエルに会うことも許さん。尤も、奴はイギリスに向かうから会うことも出来んだろうが…まあ、治療はさせるように相手には言ってお

く

『シャルル』は無表情のまま社長室を出て行った。ミシエルはその後ろ姿を見ながら鼻で笑った。

「お前にとって私は『最低の父親』だろうよ。だが…社員を食わせてやらねばならん。国を支えなければならん。そのためなら…家族などいくらでも使い潰そう」

無論、それは愛人も正妻も関係ない。そして自分すらも。

「さて……『仕込み』をするか」

ミシエルは車を用意させた。向かう先はパリ郊外にあるマリエルを軟禁している邸宅。アイザックを引き込むための『仕込み』のため

誰もが自己の存在を認めてくれないように感じる。もう母親とも会えない。イギリスに送られるといつていたが、それが何を示すのか分からない。もう、終わり。

「フフフフ。アハハハハ……」

髪を結んでいたリボンを外しそのまま部屋をでる。最後の『シャルロット』としての一日を過ごすために。外に出るとどしゃぶりの雨だった。

「なんか……お日様にまで嫌われたかなあ……」

傘もささずにふらりふらりと歩く。うつむきながら歩く自分の姿を道行く通行人が怪訝な視線を送るが、誰も声をかけない。男は昨今の女尊男卑の風潮で関わり合いになるのを避けて。女は面倒事に巻き込まれたくないから。というよりも。

「アハハハハ」

うつむき壊れたように笑い続けている自分に声をかける人間などいない。『シャルル』はそう思いながら街を歩いていた。このまま路地裏に行けば不良に嬲られるだろうか？ どうせ存在を認められない。それもいいと思っただが、それでは母親がどうなるか分からない。もう母親の無事だけが自分を支える柱。

「桂」

「……ん？ お前は、シャルロット……デユノア？」

誰だろう？ 自分を呼ぶのは。顔を少しあげるとそこには外套に身を包んだ長身のグラスンを掛けた男とダツフルコートに身を包んだ同年代の少女。

「……なに？」

「……なんつーか、同じ匂いがするな。どうした？ 世界から弾かれたか？」

男の言葉に『シャルル』は笑った。世界から弾かれた。確かにそうかも知れない。

「そうかもね……今さっき『シャルロット』から『シャルル』として生きるように命令された女……いや、男かな？ もうどうでもいいよ」

そう嘯くと少女のほづが自分を抱きしめた。雨に濡れるのもかまわ

ずじ。

「……離してよ」

「……泣きたいなら思い切り泣いたほうがいい。でない……本当
に壊れる」

少女の言葉が耳に入る。母親以外で温かい言葉を掛けてくれたのは
いつぶりだろうか。そう思うともう止められなかった。

「わた、しは……シャルロット、トなのに……う、うわあああああ
あああ！」

土砂降りの中、『シャルロット』はマドカに抱きついて泣いた。桂
は自分の外套をシャルロットに羽織らせ、そのままシャルロットが
泣きつかれて眠るまで周囲の警戒をしていた。土砂降りということ
もあり通行人も少なく、この騒ぎを聞きつけたものはおらず眠った
シャルロットを背負ってホテルまで向かった。

「（…こりゃ、色々と動くかもな）」

とりあえずはアイザックへ連絡だろう。ここで、ミシェルが気づか
ない部分で事態が動き始めた。

第12話 フランスにて（後書き）

……あれ？　なんかシャルが原作以上にハードになったような。

ま、いいか。何故、『シャルル』の事を発表したのかなどは次回から出てくるのでご安心ください。

ミシエルが予想以上に外道になったなあ。つーか、現時点で名前ありの男キャラにはセシリア父以外外道しかない。

第13話 二人の男

「……なんですか？」

「随分と嫌われたな。まあ、原因は理解しているが」

「だってそうでしょう！ 私が苦しめられるのは我慢できた。でも、あの娘は…シャルロットは！」

フランスパリ郊外にあるミシエル・デュノアが所有している邸宅。その一室でミシエルとマリエルが会談を続けていた。会談と言っても主導権はミシエルにある。

マリエルはミシエルを睨みつけていた。それこそ、普通の人間なら臆するほどの形相で。しかし、ミシエルはマリエルを見下す顔しか見せない。

「私が冷遇されているのはガマンできるわ。ズルズルと関係が続けていたのは私にも責任があるから。でも、あの娘は関係ないでしょう!?!」

「あれは私の子供だ。子供は親に従うものだ」

すでにマリエルには『シャルロット』が『シャルル』として生きて行くことを告げている。マリエルにとって娘は目に入れても痛くないほど大切な娘。だからこそ、このように激昂しているのだ。

「だからって…なんであの娘を ゴホッゴホッ ゴホッゴ
ホッ」

ベッドの上から立ち上がるうとしたマリエルだが、体が弱っていることもありそのまま崩れ落ちて発作の咳が止まらない。ミシエルが抱き起こそうとするが、右手で弾かれる。

「触らな、いでー！」

「ふん。お前には…アイザックへの土産になってもらう」

「どじいっ、じや」

荒く息を吐きながらミシエルを般若の形相で睨みつけるマリエル。アイザックの名前が出てくるのが不思議でならなかった。ミシエルは眉をひそめたがすぐに合点がいったように嘲るように笑う。

「お前は外界と遮断させていたから知らなかったか。奴は現在IS委員会のイギリス理事だ。奴はイギリスでも高い地位にいる。奴を利用すればフランスも国力を再び盛り上げることができる」

「あなたは……」

「私も社員を食わせなければならない。国を支えなければならない。そのためなら何でも利用するさ。愛人だろうが、子供だろうが、正妻だろうが、自分だろうがな」

ミシエルは小さく鼻で笑うと立ち上がり部屋を後にしようとするが、思い出したように扉の前で立ち止まるとそのままリエルの方を向かず口を開いた。

「アイザックにはあれの存在を教えるなよ？　そうすれば…あれがどうなるかわからんからな」

「貴方って……本当に最低の男ね」

「自覚している」

血が出そうなくらいに唇を噛み締めながらミシエルへと呪詛を吐く

マリエル。だが、ミシエルは気にした風でもなくその場を後にする。残されたマリエルはシーツを握りしめて唇を噛み締める。泣けない。泣いてはいけない。全ては自分が愚かだったから娘を苦しめている。

「シャル……」

窓の外は数メートル先が見えないほどの土砂降りだった。

「……」

「気がついた？」

「とりあえず…ほれココアでも飲んでおけ」

シャルロットが目を覚ますと見えたのは二人の男女。桂とマドカと名乗った二人は事情を聞き始めた。といっても、シャルロットにとつては喋ることができない。喋れば母親がどうなるか分からないから。だが。。。

「シャルロット・デュノア。ミシエル・デュノアとシュザンヌ・デュノアの娘。しかし、『何故か』数日前に事故死しており、代わりに『シャルル・デュノア』という息子が存在している。まるで、役目を引き継ぐように」

「ちなみに、シュザンヌ・デュノアとの間に血の繋がりはなく、実際は愛人であるマリエル・ローマイヤの娘」

「貴方たちは…誰？」

知られてはいけない情報までこの二人は知っている。目の前の二人のせいでもしかしたら母親が危険にさらされると感じた。だが、目の前の二人は自分を見て笑った。それは、今まで母親以外の人間が自分に向けてきた嘲りや哀れみの笑みではない。

「お前と同類だ。世界から弾かれた、な」

桂は厳密に言えば弾かれたというよりは自分から弾かれにいったようなものだが、同類には違いない。

「事情を話してみな？ 他言はしねえし…もしかしたら力になってやれるかも知れないぞ」

「まあ…身分を明かすとIS委員会イギリス理事の直下エージェントだから、やろうと思えばなんでもできるよ」

マドカはシャルロットの隣に座って微笑を浮かべた。桂は、内心様々なことを計算していた。言うては悪いが、鴨が葱と鍋と昆布を持ってやってきたようなこのチャンスを逃すわけにはいかない。それに、親近感が湧いて助けたいというのも事実。

「(さて、と。どうするか)」

しかし、マドカが意外に積極的なので自分はそのフォローをするくらいで丁度いいと思い、ココアのおかわりを作ることにした。

「なるほどね。つまり、君のお母さんをイギリスに売り渡すことでフランスのイグニッション・プランへの復帰を」

「…うん。織斑一夏というISを扱える存在が発見されたからそれを利用するって言っていた。どうするのは…私には分からないけど」

シャルロットの言葉に桂は自分が思いつく限りの織斑一夏を利用した方法を考えるが、基本的に誘拐やら洗脳やらが思いつくのでそれ以上考えないことにした。というより、そんな謀略はアイザックに頼む。

「アイザック、に？」

「どうしたの桂？」

「??？」

突然、黙り込んだ桂を心配そうに見る二人。桂は何かにつっかかった。シャルロットの話の聞く限り、マリエル・ローマイヤをイギリ

スに売り渡すのだろう。その対価としてイグニツション・プランへの復帰の口利きをしてもらうのがミシェル・デュノアの　フランスの策だろう。戸籍の改ざんから来歴の偽造まで、もはや国が関わっているのは事実として考えたほうがいい。しかし、それだけの事をマリエルをイギリスに渡すだけで成し遂げられるか？

「シャルロット。お前のお母さんは…何か貴族とか資産家の娘だったりするのかわ？」

「ううん。私が聞いた限りだと普通の一般家庭のはずだよ」

となると、マリエル・ローマイヤに『人身御供』となるだけの価値はない。そもそも愛人として差し出すにしても、進んで受け取る人間はいるまい。そして、イグニツション・プランへの復帰の口利きをするには、アイザックを攻略しなければならぬ。資産価値のないマリエルを渡されて『あの』アイザックと交渉するか。

「あ、そういう事か」

「「??？」」

「いや。どつちやら色々と簡単に事が運びそうだ」

そもそも自分たちがここにいるのはなぜか？ アイザックが珍しく私情まみれで命令してきたから。その理由はミシエルとマリエル関係。そして、シャルロットの話を総合して考えて見ればすぐに分かる。

「マリエル・ローマイヤを差し出す相手はIS委員会イギリス理事のアイザック・アルバート。アイザックならイギリス女王陛下の信頼も厚く、議会を掌握するのも容易い。だからこそ、イグニツション・プラン復帰への口利きもやりやすくはある」

そもそもアイザックがマリエルに執着しているのは少し観察すれば分かる。それに、アイザックとミシエル、マリエルは学友だったと聞いている。それなら、ミシエルがそのことを知っていてもおかしくはない。

「シャルロット。もしかしたら…お母さんと離れなくてもすむ。まあ…『シャルロット・デュノア』として生きて行くことはできないかも知れないけど、『シャルロット・ローマイヤ』としては生きて行けるかも知れん」

「えっ？」

桂の言葉にシャルロットの目に希望が灯った。桂はすぐさま外套を身につけるとシャルロットの頭をぼんぼんと叩き笑った。

「とりあえず、任せておきな。マドカ、とりあえずこっちは頼む。シャルロットを帰すときには充分に注意しろ。ミシエル・デュノアにバレると一気に状況が変わる」

「うん」

桂はそれだけ告げるとシャルに「心配することはないが、決して喜ぶな。感情を表に出すな。バレると…二度と母親と再開できないばかりか、もはやお前の自由意志など抹殺される」と言い含めてホテルを後にした。

「…大丈夫。桂ならアイザックを説得してくれる。その必要はないかもだけど」

「そっなの?」

そもそもアイザックが私情丸出しのため、この情報も嬉々として策に組み込むはず。

「とりあえず、もう暫くお話しよ?」

「うん!」

マドカのほうが一歳年上ではあるが、互いに特殊な事情で同年代の同性の友人がいなかった。だから、会話も弾む。それは、シャルロットにミシエルからの電話がなければ夜通し続いていただろう長さで。

「　　というわけでシャルロットをこっち側に引き入れることができたかもしれないって……大将？」

「クッククックク」

裏ルートでイギリスに戻った桂はすぐさまアイザックにフランスでの調査結果とシャルロットの事を報告したのだが、アイザックの様子がおかしい。

「そうかそうか。そうだよなあ……お前は昔からそういふ男だった。

家族でも利用出来るならば積極的に利用する実利至上主義にして俺と同じく結果主義者」

アイザックは肩を震わせて笑っている。桂はこんなアイザックを見るのは初めてなので驚いているが、嫌な予感がビンビンだった。

「そちらが利用するならこちらも利用させてもらう。クッククク…
…ハッハッハ…ハハッハッハッハ！」

立ち上がり天井を仰ぎながら大笑いするアイザック。桂はぶっちゃけどん引きだった。

「（三段笑いって…完璧ラスボスだろ！）」

あながち間違いはない。というより、お前はその右腕だろう。

第13話 二人の男（後書き）

ということ、シャル編もクライマックスです。

シャル編が終われば閑話を2、3話書いて原作に入ります。といっても、原作イベントに殴りこみをかけるか、その裏側で動くことになるかもしれないですね。

PS・AC5の発売日が近づいてきましたが…話を聞くと銃火器のサイトロック関係が4以前のものになるらしいですね。楽しみではあるのですが、時間と金銭的な問題でしばらく買えそうにないですね……。

第14話 混乱

世界は再び混乱していた。

織斑一夏以外にも男でISを操縦する存在がいた!?

それはフランスのデュノア社社長の息子シャルル・デュノア!

織斑一夏の存在が報道された数日後にフランスでも同じような存在が発見されたという。そのため、IS委員会の理事会は非常に混乱していた。アイザック以外は。

「(ミシエル…なるほど、これは奴の策か)」

シャルロットの存在を知っているアイザックはミシエルの策略ということに気づいた。ミシエルの異名である『フランスのハゲタカ』らしいといえはらしい。

「(時間があけば、替え玉などで疑われる。それよりも、同時期に同じような存在がいると発表すれば…ごまかしは効く)」

フランスが発表した資料には、丁度織斑一夏がISを起動した日にシャルルも起動させたと記載されている。調査結果では、様々な可能性が書かれている。織斑一夏の影響で起動できたのではないかというのが一番信ぴょう性が高いだろう。他にも織斑一夏は篠ノ束の知り合いであるため、彼女が何らかの操作を行い、その影響を受けたという説もある。

「（それが真実ならば、な）」

二人の男性操縦者の処遇について議論を交わしていたが、途中休憩を挟むことになり、アイザックが桂を連れて喫煙室で会話をしていたのだが、ある男が近づいてきた。その男はミシェル・デュノア。現在、息子のことで議会に呼ばれている男である。

「……桂」

「あいよ」

桂が去っていった喫煙室では、かつての学友にして好敵手同士が互いの腹の中を探るような会話を始めた。

「久しぶりだなアイザック。元気そうぞ何よりだ」

「そちらも…奥方とは仲が良さそうで何よりだ。で？」

「相変わらず必要以外の周りくどいことは嫌いな奴だな。策謀は好きなくせに」

肩をすくめるミシエルと睨みつけるアイザック。喫煙室の周りには他国の理事などがいたのだが、全員喫煙室から溢れ出る黒いオーラに怯えて遠巻きに見るだけ。桂は「胃痛になりたくなければさっさと散ったほうがいいぜ」と促していた。

「しかし…息子がいたとはな。娘はどうした？」

アイザックはミシエルの策を知っているが、それは決して顔には出さない。『真実』をミシエルに気づかれれば計画が狂う。

「不慮の事故で死んでしまったよ。まあ、お前なら部下をフランス国内に放っているから真相は知っているだろう。アイザック…私に協力しろ」

桂とマドカの目眩ましとして調査員をフランスに放っていたので、桂たちがシャルロットと接触したのは気づかれてはいないはず。そう考えながらアイザックは答えた。

「『シャルル・デュノア』を餌にしたイグニッション・プランへの復帰の助力か？」

「もしくは…イギリスとの技術提携かな？」

「国が許可するののか？」

「ククツ。『シャルル・デュノア』の存在を認めたからな。裏切るなら…一緒に地獄に落ちてもらうさ。そもそも、この話を持ちかけたのは国だ。私はただ『ウチの娘は中性的な容姿で、今話題になっている織斑一夏と並んでも…女だとはバレないと思いますね』と『独り言』を呟いただけだ。まあ……イグニッション・プランの事を引き合いには出したがね」

きっかけはミシエルかもしれない。そこまでのお膳立てをしたのもミシエルだろう。しかし、実際にGOサインを出したのは国。そして、ミシエルは国の醜聞を持っている。つまりは、互いにどのようなことがあっても裏切れない。裏切らせない。

「相変わらずの手際だな」

アイザックが弱みを作って相手を従わせる策士なら、ミシエルは強制的に一蓮托生の身にしてしまう策士。タイプは違うが、二人とも

相手にしたくないのは事実。

「だが、こちらにメリットがないな。確かに、ラファール・リヴァイヴを開発した手際はたいした物だが……それ以外メリットが「マリエルを……差し出そう」「……ほう？」

「お前ならば……メリットなど適当に見繕うことができるだろう？ その駄賃としてマリエルを差し出す」

その瞬間、アイザックはミシエルの胸ぐらをつかみ自分の方へと引き寄せた。外の人間は桂が追い払ったらしく誰もいない。

「貴様……そこまで堕ちたか」

「ククツ。お前と同じ結果主義なだけだよ。それに……あの女一人でお前が協力してくれるなら安いものだ。良い返事を期待しているよ」

ミシエルは首からアイザックの手を外しアイザックの肩を叩いて喫煙室を出て行った。その顔に笑みを浮かべて。だから、気付かなかった。こちらを見据えるアイザックの目に嘲笑の色が浮かんでいたのに。

「（礼を言うぞミシエル。では、マリエルと『シャルロット』を頂

くとする)」

そもそもメリットなどつくろうと思えばいくらでも作れる。まずは、イギリスはフランスをある程度支配下における。確かに、イグニッション・プラン復帰への口利きによりフランスと共倒れする可能性があるが、千冬とコンタクトを取れる桂という存在がいる。彼女のトラウマを刺激してやれば、桂に対して献身的になるように仕組むこともできる。そこから織斑一夏を手中に収めることもできる。メリットはそれだけではない。そもそも国に対して借りを作る時点で相当なメリットになる。まあ、ミシエルもそこは考えているのだろうが、あの男の場合は一時の屈辱に耐えるくらいなんともないのだろう。付き合わされた国には同情するが。

「桂。マドカに屋敷の地下ドックに向かうように告げる」

「ん？ 何かあるのか？」

「バレたら少々まずいが……『シャルル・デュノア』を誘拐する。すでに準備は済ませてある。マドカが地下ドックに向かえば説明を受けるはずだ」

「……なるほどね。了解」

桂はそのままアイザックの屋敷にいらるであろう同僚にマドカを呼び

戻すように伝えた。自分がやらないのはただ単に会議が再開するの
でそのための警戒に意識を割かなければならないから。

「（ううむ……面白くなってきたねえ）」

惜しむらくは自分が動く必要がなさそうな事。マドカは動くような
ので羨ましい限りである。

会議の結果は、織斑一夏は来年度よりIS学園に入学させ、その間
に技術などを磨かせ、卒業後は国連預かりにすることということで決着
がついたが、シャルル・デュノアに関してはデュノア社所属という
ことで身柄に関してもめたが、アイザックを中心とする欧州連合の
猛プッシュによりフランス所属のままになることが決定した。アイ
ザックがイグニッション・プランにフランスを復帰させれば、貸し
をつければ『研究』も性能がよいことで知られているデュノア社の
製品を買いやすくなるとささやいたからである。

「これは…アラクネ？」

「といつても、外見だけのハリボテさ」

連絡を受けてイギリスに特急で戻ってきたアイザックの屋敷の地下ドックでマドカは一体の鎧を見ていた。ISではなただの追加装甲。それは、アラクネに酷似していた。

「それと、桂君の『電磁発勁』を模倣した電磁パルス発生装置のおかげで数分間だけならコアネットワークにも補足されないステルス装置を搭載しているからバレはしない」

しかし、コストや出力の問題でそのステルス装置は一回しか扱えない。しかし、その一回さえ逃げ切れればこちらの勝ち。

「というより、大掛かりすぎない？」

「僕としては色々面白そうだからいいけど？ というより、アイザックが私情まみれで動くことなんてレアだからねえ」

目の前の科学者は本当に楽しそうに笑う。アイザックの部下は一癖も二癖もある人間ばかりである。この科学者もその部類である。

「とりあえず、何かしらの合図があるからもう一回フランスに戻ってシャルル・デュノアに張り付いておいて」

「分かった」

追加装甲をサイレント・ゼフィルスに装着し、待機状態のメガネに戻すとそれを掛けて地下室を出て行った。

「久しぶりだな。マリエル」

「そうね…本当に久しぶり」

数日後、フランスよりマリエル・ローマイヤがやってきた。ミシエルからの連絡が事前にあつたため桂とはまた違う部下とメイドを一人連れて空港にやってきた。そして、待つこと数分。黒服が押して

きた車椅子に座るのは記憶の中よりも年を経ているが、未だに学生時代の面影を残しているマリエルだった。

「それでは私たちはこれで。それと、社長から「分かっているさ」「それは重畳」

黒服はさつさと出国ゲートへと向かっていった。アイザックはその去っていく黒服に向けて嘲笑を浮かべると、メイドにマリエルの車椅子を押させて一時邸宅へと向かうことにした。

「アイザック…私は」

「心配は要らない。すぐに娘とも会えるさ」

「え？」

車の中で向かい側に座るアイザックはマリエルを安心させるように微笑むとラジオを点けた。そこでは、織斑一夏とシャルル・デュノアについてのIS委員会が出した結果が放送されていた。しかし、突然緊急速報が伝えられた。

『フランスデュノア社が所属不明のISに襲撃され、シャルル・デュノアが強奪された』という速報が。

「シャルロット　　！」

マリエルは目の前が真つ暗になる様な錯覚を覚えたが、アイザックに抱きとめられあることを口にする。

「心配は要らない。これも計画の内だ」

邸宅に戻ればすぐに娘に会える。アイザックはそう言っていた。

第14話 混乱（後書き）

最近、布団から出るのがきつい作者です。

今回は、こんな感じですよ。穴だらけなのは勘弁して下さい。これでも結構頑張って描いてみたの…。

とりあえず、次回でシャル編は終わりです。なので、閑話を書くつもりなのですが、リクエストとかあったらどうぞ。そのとおりにかけるかは怪しいですが。

書く予定なのは、桂+マドカ+シャルのお話。セシリアのお話の二つ。その他でなんかありましたらどうぞ。そう言えば、ヤンデレ妹がひとりいたなあ…。

第15話 決着

マドカは技術班特製の白人系のデスマスクを付けたままフランスを歩いていた。デスマスクと言っても、質感など本物の顔と変わらないためバレる確率は低い。

「（合図って一体なんだろう？）」

シャルロットとはアドレスも交換して、発信機も付けているため居場所は分かる。デュノア社の5階フロアにいるのは分かっているし、実際に望遠レンズで窓際に居ることも調査済み。アイザックが合図を出すと言っていたのだが、その合図がよく分からない。そう思っていると、デュノア社にミシェルがやってきた。

「…「決行だ」」

突然、すれ違った男に驚くが、その男はすれ違いざまにアイザックの部下だけが持っているペンダントを持っていた。マドカはすぐに我に返ると、アラクネに偽装したサイレント・ゼフィリスを展開し、デュノア社に向かって呐喊を開始した。

「（合図って…いきなり過ぎる！）」

毒づきながらもハイパーセンサーに捉えたシャルロットがいる場所へと呐喊し、フロアのガラスをライフルで撃ちぬき、社内に侵入する。無論、そのような事をすれば警備員などが来るのだが、マドカの狙いはシャルロットのみ。シャルロットの目と鼻の先に突撃してきたのだ。

「シャルル・デュノア……頂く」

機械を何重にも通した声でそう宣言する。シャルロットは逃げようとするが、それよりも早くマドカがその体を掴み、スタンガンで気絶させる。その瞬間にシャルロットの耳元でささやく。

「ゴメンね。でも、大丈夫だから」

「え」

気を失いぐったりとしたシャルロットを抱えながら、やってきた警備員を牽制しながら外に出る。しかし、そこにやってきたのはフランスの国家代表IS操縦者。

「さすがに……速いな」

「一応、政府から警戒するように言われていたからね。それよりもシャルル・デュノアを速やかに解放し、投降しろ。そうすれば…まあ、そこまで悪いようにはしない」

アラクネに偽装しているため、マドカは十全の力を出せない。サイレント・ゼフィルスであることを気づかれればこの計画もおじゃんになってしまう。しかし、国家代表を相手にこの状態で勝てるかというところ。基本的にマドカは戦う相手を常に自分より強者であると考えている。それは、ツングースカにおいて桂と戦った経験から学んだこと。だから戦闘よりも逃走を最優先させる。

「(さすがに…このまま時間が経てばこちらが　ん?)」

その瞬間、相手のISの装甲に何かがあたった。それに気づいた操縦者が装甲を見ると煙を上げて腐食していた。

「な、なん　ッ!？」

次々と自分に撃ち込まれる弾丸の数々。逃げようにも、装甲やバーニアが腐食し始めて上手くいかない。

「一体何が　」

操縦者が必死に回避しようとしているが、何が起きているのか分からない。出来るのはせいぜい自分の身を守りつつマドカをロックオンするくらい。しかし、マドカもシャルロットを盾にしているため攻撃はできない。こうしている間にもどこからか撃ち込まれる弾丸により装甲は腐食している。

「ジョシユア。右に五度、下に八度だ」

「了解」

廃ビルの屋上に二人の男がいた。一人は観測用の望遠鏡を覗きながらフランスの国家代表のISの距離を見ている桂。もう一人は、伏せ撃ちの体制で桂から送られる情報を元に狙撃を行う大柄の男ジョシユア。

「つーか、やっぱこの腐食弾ってヤバくねえか？」

「開発に協力している君が言うことじゃないと思うよ。それに、腐食弾じゃなくて कोरोシジョン弾だよ？」

この二人はアイザックの命令によりマドカのサポートを命令されていた。ジョシユアはオルコット家から直接フランスに赴き桂と合流、今に至る。

「そついやそんな名前だったな。まあいいさ。それより、弾数は？」

「あと10発。そろそろ動かないとマズイね。こつちにも気づく可能性があるから」

一応、国家代表が乗っているラファール・リヴァイヴのカタログスペック上のハイパーセンサーの範囲外からの狙撃のため狙撃方向は分かってても、狙撃犯がバレルの可能性は低いはずだが、増援が来ればその分バレルの確率は上がる。

「お…離脱を開始するようだ。俺らも逃げるぞ」

「通信していないのにわかるって……愛だねえ」

「うるせエよ。お前だってオルコットのお嬢様といい雰囲気じゃね

えのか？」

「今丁度思春期だからね。年上に憧れる時期さ」

そんなことを言いつつも、手早く痕跡を消すとすぐにその場を離れた二人。

「悪いけど…行かせてもらっ」

「ま、待て　クソ!？」

一方、狙撃の援護を受けていたマドカは、すきを見て最高速で離脱しそのまま姿をくらました。それはコアネットワークにも補足されずに行方不明となった。フランスやIS委員会は全力を持って捜索を開始したが、北極方面に向かったということ以外足取りはつかめなかった。

「シャル！」

「母さん！」

アイザックの邸宅にて、マリエルとシャルロットが抱き合っていた。二人とも泣きながら互いの存在を確かめるように体を抱きしめあう。事情を知っているものからすれば号泣モノで、実際メイドの数人はボロボロ泣いている。

「いや、家族って本当にいいものですね（水野晴 風）」

「……………」

桂の言葉にジト目で圧力を掛けるマドカ。そして、アイザックはマリエル親子を見て珍しく優しい顔をしている。それに気づいた桂たちが啞然としていた。例えるなら「（ ）」「（ ）」

「さて、そろそろいいか？」

「アイザック。その…ごめんなさい」

感動の再会も一段落ついたようなので声をかけると少し顔を赤くしたマリエルが謝ったがアイザックは気にすることはないと笑い、今後のことを話し始めた。

「その…僕はどうなるんでしょうか？」

シャルロットが不安そうに質問すると、アイザックは桂とマドカを呼び寄せた。

「身柄に関しては心配する必要はないが、暫くはこいつらと行動してくれ」

「……大将。俺はそろそろ暴れたいです！」

今回の計画で裏方ばかりだったため、暴れたい桂はそう自己申告するが適当に流される。

「シャルロット。お前は…ISに乗りたいか？」

「……乗りたいです。母さんを守るためにも……僕は……私は強くなりたいたい」

それは、ISの腕だけではない。今回の件は自分がもう少しうまく立ち回ればもっと早く母親を助け出せたとシャルロットは思っていた。だからこそ、いろんな意味で強くなりたいたいのだ。

「そうか。なら……マドカに教えてもらえ。ISは……用意する」

「え？」

ISを一機用意するくらいアイザックにはたやすい。今回の件で得るものは大きい。その対価とすればイギリスも納得する。

「大将」。デュノア社の社長から連絡が来ているぜ」

「クッククックク。さて、暫くは休んでいるといい。此処から先は……私の領分だ」

桂を連れてアイザックは自分の執務室へと向かう。マリエルたちが心配そうに後ろ姿を見つめていたが、マドカが心配する必要はないと諭していた。

『やってくれたな』

「さて、何のことかな？」

通信を繋げてきたミシエルはアイザックを憎々しげな顔で睨みつける。対するアイザックは余裕の態度を崩さない。

『とぼけるな。タイミングのよさ、そしてその他の状況からお前が裏で手を引いているのは分かっている』

「知らんな。確かに、マリエルを支えたいのは事実だ。だが…シャルル・デュノアとは関係がないだろう？ 彼とは血の繋がりはないからな」

アイザックは決して言質をとらせない。少しでも口を滑らせばそこ

を突いてくるのは理解しているから。一方のミシエルも同様。かつて学生時代は『似たもの同士』とよく言われていた。思っていることは同じ。

「まあ…仮に私が手を引いていたとして……そちらにできる事は少ないんじゃないかな？」

例えば、デュノア社襲撃。これに関しては、アラクネに偽装したサイレント・ゼフィルスが実行したが、織斑一夏誘拐事件のデータを公表しているため多国は亡国機業の犯行と断定している。今更覆ることもあるまい。まあ、イギリスが亡国機業と共謀したということになる可能性もあるが、桂が仕事で何回か亡国機業とガチの殺し合いをしているためごまかしは効く。

そもそもアイザックやイギリスの機嫌を損ねれば『シャルル・デュノア』は存在しないことがバレてしまう。国力回復のために自身の娘を息子として利用しようとした、実の母親を盾にとったなどがバレればどうなるか。しかも、国も協力していたフランスの信用は地の底に墜ちる。そこでデュノア社を切り捨てられればそこまで傷も負わないだろうが、そうできないだけの醜聞をミシエルに握られている。

「まあ、協力はするぞ？ マリエルという対価を差し出されたのは事実だからな。仕事はしっかりとしなければならぬ」

『…………』

ミシエルもアイザックが黒幕だと気づいている。伊達に学生時代から競い合っていたわけではない。

『クツクツクツク。今回は私の負けか』

故にミシエルは素直に白旗を揚げた。アイザックも笑う。ミシエルは例えアイザックが黒幕だと自白しても報告はしない。なぜなら負けたから。それは一種のプライドのようなもの。それに、このことを公表してもイギリスは「マリエル・ローマイヤより懇願されてやむなく実行した」とでも言えばこの女尊男卑の時代。逆にフランスが四方から叩かれる。

「お前の敗因は駒を駒として見過ぎたことだな」

『人の心は御し難い。特に女は、な。だから感情で動く女は嫌いだ』

アイザックとミシエルは似ている。しかし、違うところが一つある。それは、アイザックが駒によって対応を変えるのに比べ、ミシエルは駒によって対応を変えることはない。だから、シャルロットを追い詰めすぎてしまい、結果として桂たちと接触するきっかけを作った。ただ、それだけの違い。

『まあいいさ。こちらとしては、シャルル・デュノアが生きているかも』しれないとすれば色々な引き伸ばしはできる』

「こちらとしてはフランスを完全に支配下におけるのが強みだな」

フランスとしてはイギリスに頭があがらないのは屈辱だろうが、時間稼ぎはできた。第三代機関発もイギリスからの情報を貰えば少しは進歩するだろう。だから今は屈辱に耐える時。その時が過ぎれば。。。

『いずれ喉笛に食らいついてやる』

「期待しないで待っていていよう」

どこまでも自分勝手な男たちの会談は終了した。

「……あれ？俺空気じゃね？」

桂はどつでもいいことを考えていた。

第15話 決着（後書き）

ということでシャル編は終わりです。

ミシエルはアイザックが介入したことに気づいていますが、劇中でもあるように公表しても自分へのダメージが大きいので黙っておくことにしています。

さて、次から数話閑話になります。どんな話を書くかは楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4017z/>

IS～インフィニット・ストラトス～ とあるはみ出し者の物語

2012年1月14日13時22分発行